

目次

トップ型TGUと一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築 ビジュアル資料	1
協同的探究学習法研究会	2
SGH研究成果発表会	3
「協同的探究学習」指導法研究会	4
第1章 スーパーグローバルハイスクールの取り組みと協同的探究学習	6
1. はじめに	6
2. 研究開発単位Ⅱ：協同的探究学習とは	6
3. 協同的探究学習を用いて主体的に探究する生徒を育てる	7
4. 心理学の観点からみた協同的探究学習	8
5. 心理学の観点からの学力モデル	12
第2章 本校の実践紹介	14
1. 国語（高校・現代文）	14
2. 国語・現代文B（高校2年生）	16
3. 世界史A（高校1年生）	18
4. 英語・コミュニケーション英語（高校1年生）	20
5. 英語・コミュニケーション英語（高校2年生）	22
6. 美術（高校1年生）	24
第3章 協同的探究学習 アイディア	26
1. 授業案作成の指針	26
2. 国語（中学1年生）	28
3. 国語総合・現代文（高校1年生）	30
4. 社会（中学・地理的分野）	32
5. 現代社会・政経（高校生）	34
6. 英語（中学2年生）	36
7. 英語（高校1年生）	38
8. 音楽（中学2年生）	40
9. 体育（高校1年生）	43



京

名古屋大学教育学部附属中・高等学校

研究開発構想：トップ型TGUと一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築



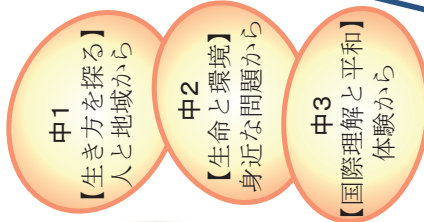
目標:ものごとの本質を捉え、国際的視野を持って探究し続ける、勇気と判断力のある「自立した学習者」を育てる

研究開発単位Ⅰ：国際的視野を持って探究する6年必修課題研究「総合人間科」

教育方法：Project Based Learning 評価方法：ポートフォリオ評価 パフォーマンス評価

「課題探究Ⅰ」

幅広い興味関心から探究する心を育む



中学

高校

「課題探究Ⅱ」

○中学の学びを基に、高校3年間で文理にとわれない1つの「地球的課題」を対象に探究する、仮説検証型課題研究

○グローバルキャリアモデルとのリレーションポジウム



地球的課題の6領域

研究開発単位Ⅲ：グローバル拠点を活用して、表現力や判断力を身につける方法の開発

国内拠点 他、高校生と協同して英語で留学生と行う課題発見・課題解決型探究活動

○名古屋大学Global Discussion

海外拠点 現地の高校生と協同で行う探究型プロジェクトでの活用

○アジア拠点【モンゴル】新モンゴル高校、日本大使館、JICA事務所
○北米拠点【米国】Chapel Hill High School、ノースカロライナ州商務省

研究開発単位Ⅱ：国際的素養を身につける 協同的探究学習(既存教科)

教育方法：発問を受けての個別探究→集団による探究→再度の個別探究

SSHとの相乗効果

○大学教員による連続講座 学びの杜
SSH生命科学探究講座 SSH地球市民学探究講座
SSH物理学探究講座

○教科の枠を超えた融合カリキュラム
SSH自然と科学 SSH情報と社会
SSHとSGHiは学習者にとって車の両輪

課題研究以外の研究開発

○Active Learning in English (ALE)

(Global Issueを留学生と英語で討論)

自立する学習者育成のための英語環境

○G80 for everyone (多様なステークホルダーとの討論)

○NUPACE(短期留学生と学びを共有)

○G80 International Program (長期留学生と学びの共有)

高等教育へ繋がる「自立した学習者」



トップ型SGUと一体化した研究開発

○高大接続研究センター (H27年4月本校に開設)

協同で以下を研究開発
・高大接続入試
・Advanced Placement (AP) curriculum
・IB資格の活用方法

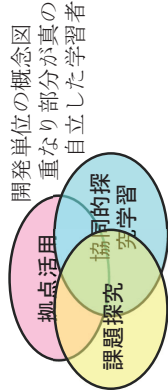
○名古屋大学海外事務所

○リーディング大学院

グローバルな学生と生徒の学び合い

他大学との連携

・愛知大学
GGJさくら21プロジェクト
・名古屋外国語大学



第3回 協同的探究学習法研究会 2019年7月31日

講義講師：東京大学大学院教育学研究科 藤村宣之先生



本校教員による協同的探究学習模擬授業



教科に分かれて指導案作成



教科に分かれて指導案作成



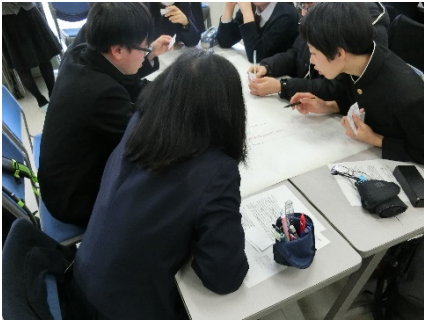
国際的素養を身につける協同的探究学習 -新学習指導要領「探究」に向けて-
講演講師：東京大学大学院 教育学研究科 秋田喜代美先生



中学1年生 体育



中学2年生 国語



中学3年生 英語



高校1年生 課題探究II



高校2年生 課題研究II



ポスターセッション



秋田喜代美先生 講演

第2回 生徒の主体的な学びを促す「協同的探究学習」指導法研究会 2019年2月8日

講義講師：東京大学大学院教育学研究科 藤村宣之先生



藤村宣之先生 講義



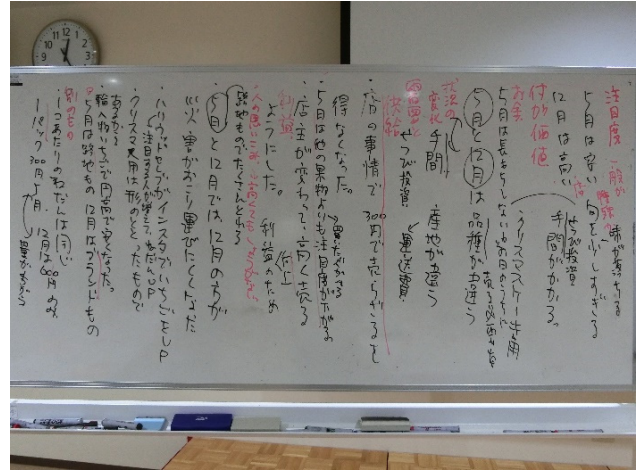
本校教員の実践紹介



教科ごとに分かれての成果と課題を共有

第1回 生徒の主体的な学びを促す「協同的探究学習」指導法研究会 2018年7月25日

講義講師：東京大学大学院教育学研究科 藤村宣之先生



本校教員による協同的探究学習 模擬授業 および全体での共有



藤村宣之先生の解説



教科に分かれて指導案作成

第1章 スーパーグローバルハイスクールの取り組みと協同的探究学習

1. はじめに

本校は、2015年度よりスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定を受け、『トップ型TGUと一体化して「自立した学習者」を育てる探究型カリキュラム構築』をテーマとして研究に取り組んでいる。今年度は、SGH指定5年目である。

巻頭のビジュアル資料に記載した研究開発単位Ⅱの実施においては、国際的素養を身につける方法として、「協同的探究学習」を取り入れている。2019年2月8日のSGH成果発表会は、「国際的素養を身につける協同的探究学習 ～新学習指導要領『探究』に向けて～」をテーマとして開催した。研究成果発表会には、全国から178名（教員《124名》、大学生《46名》と教育委員会他《8名》）が参加した。この成果発表会では、協同的探究学習を用いた授業が公開された。公開した授業は、中学の国語・社会・英語・体育である。公開授業の後、授業検討会を開催し、参加した教育関係者の方々に実践報告を行い、質疑応答の機会を設けた。

また、「協同的探究学習」指導法研究会の第1回を2018年7月25日、第1回を2019年2月8日、第3回を2019年7月31日、第4回を2020年2月7日に開催した。第1回目には、他校の教員が協同的探究学習を取り入れた指導案を創る過程を本校教員がサポートした。作成した指導案を他校で実践し、その成果と課題を第2回目以降に持ち寄って共有している。これによって本校での取り組みの普及のみでなく、他校での取り組みのフィードバックによって協同的探究学習を深化することができた。

本書においては、「協同的探究学習」における成果を中心に報告を行いたい。

2. 研究開発単位Ⅱ：協同的探究学習とは

（1）目的

国際的素養を身につけるために、既存教科すべてに「協同的探究学習」を取り入れ、他者とコミュニケーションを取りながら協同して問題解決する学習方法を開発する。学校カリキュラム全体を暗記・再生の中心の教育方法から理解・思考型学習方法に変換することを目的とする。

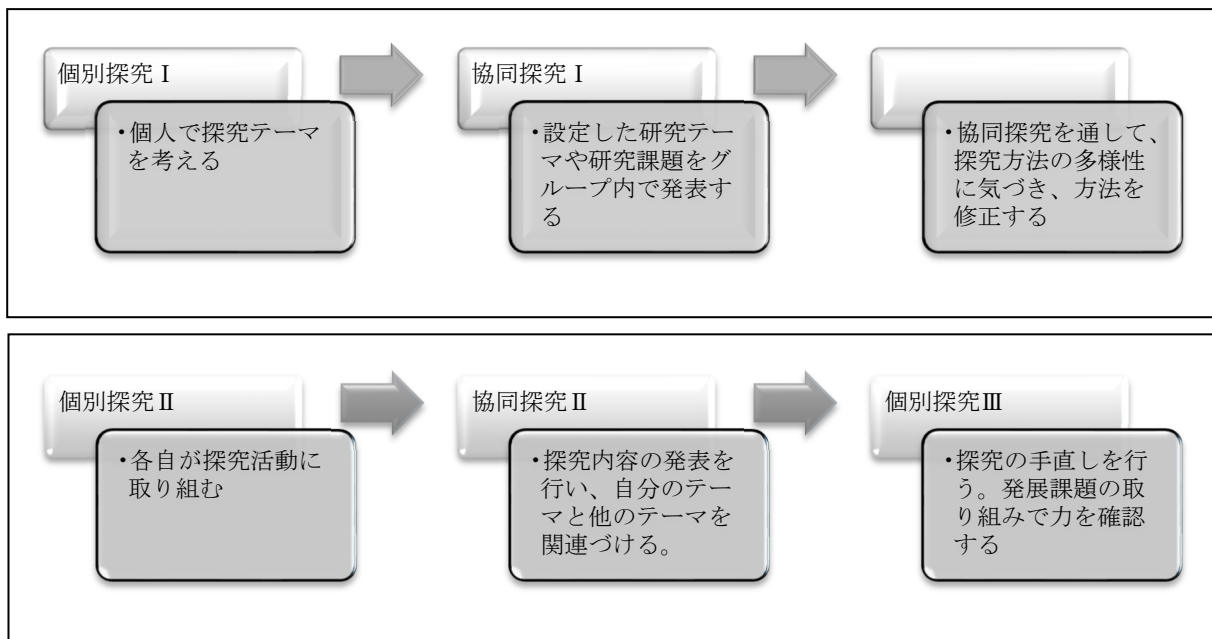
（2）期待される効果

地球的課題に対しては、他民族・多国籍の人々と協力して課題発見と課題解決をする必要がある。そのためには偏見や偏狭な思考と行動から脱し、人間相互のインタラクションを重視する思考と行動が求められる。既存教科すべてに「協同的探究学習」を取り入れることで、現代社会が求める、他者と協同して問題解決ができる、国際的素養を身につけることができる。

（3）内容

初等中等教育において、従来から行われてきている学習は、正しい解法と答えはただ1つであることを前提に、暗記した事象を適応させることが中心であった。この形態の学習法では、自分が以前習得した問題解決法が適用できない問題に対しては充分対応することができない。本校が実践する「協同的探究学習」では、問題を解決するための方法は多様であり、自分の持っている知識と他者が持っている知識を活用しながら、問題解決法を自分で考案することである。その思考プロセスを他者に表現し、共有することで問題の本質を理解し、問題解決にあたる「わかる学力」を育成する。

(4) 指導方法



3. 協同的探究学習を用いて主体的に探究する生徒を育てる

既存の教科のみでなく、課題研究に「協同的探究学習」を取り入れることで、現代的な課題の本質について、他者と協同しながら主体的に探究し続けることのできる生徒を育成できるという仮説を立てた。

理解・思考型学習である協同的探究学習は「わかる学力」を育成するのに適した方法である。課題研究に取り入れることで、因果関係について自分の考えで説明する力や、課題の本質を理解し、多元的・長期的に考える力を育成することができる。既存教科で身につけた各教科内の「わかる学力」と、課題研究の中で身につけた教科横断型の「わかる学力」の相乗効果により、主体的な学びへと生徒が変化し、理解・思考・表現力が高まると考えた。

ドリル演習などで決まった解法を暗記することで身につけた学力（「できる学力」）だけでは、問題の本質を理解することができない。本校では、このような「できる学力」に対して、物事の本質を捉え、他者と協同しながら問題解決に向かうことのできる力を「わかる学力」と呼んでいる。「できる学力」「わかる学力」という概念規定や「協同的探究学習」の理念は、藤村宣之教授（東京大学大学院教育学研究科）によるものである。

4. 心理学の視点からみた協同的探究学習と育てる力

『協同的探究学習で育む「わかる学力」 豊かな学びと育ちを支えるために』

ミネルヴァ書房 2018年3月

藤村宣之教授（東京大学大学院教育学研究科）

橘春菜（名古屋大学 運営支援組織等 教育基盤連携本部 特任准教授）

名古屋大学教育学部附属中・高等学校 編著 より引用

協同的探究学習で育む
「わかる学力」
豊かな学びと育ちを支えるために
藤村宣之・橘春菜
名古屋大学教育学部附属中・高等学校
編著



学びが深まるメカニズム!
中学・高校のさまざまな教科の現実事例を通して、
「人ひとりの学力」が高まるしくみを解説。

「わかる学力」と「できる学力」

認知心理学の視点から学力の内容を分析すると、解決方法がひとつに定まる定型問題に対して、一定の手続きを適用して解決する力（できる学力）と、自分自身で多様な知識を関連づけることで、多様な解決方法が可能な非定型問題の解決を導いたり、その思考プロセスを表現したり、諸事象を深く理解したりする力（わかる学力）に大きく区分することができる。学力やリテラシーに関する国際比較調査や国内の調査の問題ごとの結果を問題解決のプロセスに着目して心理学的に分析すると、日本の児童・生徒の特徴として、定型問題を解決する「できる学力」は高いが、非定型問題を解決・探究する「わかる学力」が相対的に低いことが、学校種（小・中・高）や教科（数学・理科・国語など）を越えた全般的傾向として明らかになってくる。その傾向をもたらす可能性のひとつとして、さまざまな点で最終的には「できる学力」の育成が重視されている、各教科の従来の授業過程の特徴がみえてくる。

序章（上梓書参照）で説明した表 序-1 では、「伝統的な教室の実践」の特徴として、理由や過程を理解せずに事実を記憶したり手続きを遂行したりすることがあげられている。理由や過程の理解を求めないという学習プロセスは別として、認知心理学の領域では、手続き的知識（procedural knowledge）の獲得過程と、概念的理解（conceptual understanding）の深化過程とが区別されてきた。認知心理学的な観点から、子どもによって達成される内容とその達成過程に依拠して、教育目標としての「学力」と、それを達成するための学習方法を区分できると考えられる。

（1）学力の心理学的モデル

図 1-1 では、そのような心理学的視点から教育目標としての学力が、手続き的知識・スキルの獲得と概念的理解の深まりに区分され、両者の形成過程と、その形成に有効と考えられる学習方法が対比的に示されている（藤村，2012）。

解決方法がひとつに定まる定型問題に対して、特定の手続き的知識・スキルを適用して解決することを「できる学力」と表現する。また、問いと答えとしての知識との対応が一对一に決まる事実に知識も定型問題の解決を導く点で、「できる学力」に含めて考える。このような手続き的・事実に知識の獲得メカニズム、すなわち「できる学力」の形成メカニズムは、繰り返し（反復）による自動化（automatization）である。すなわち、「できる学力」については、ある手続きが適用可能な同種の問題に繰り返し取り組むことにより、その手続きの適用がより正確で速くなり、そのプロセスに十分な注意を向けなくても自動的にできるようになっていく。たとえば、九九の暗記や漢字の正確な表記、特定の公式等を適用した同種の問題の解決などがその例としてあげられる。手続きの自動化が進むことで、人間の限られた情報処理容量を他のプロセスに割り当てることが可能になる。

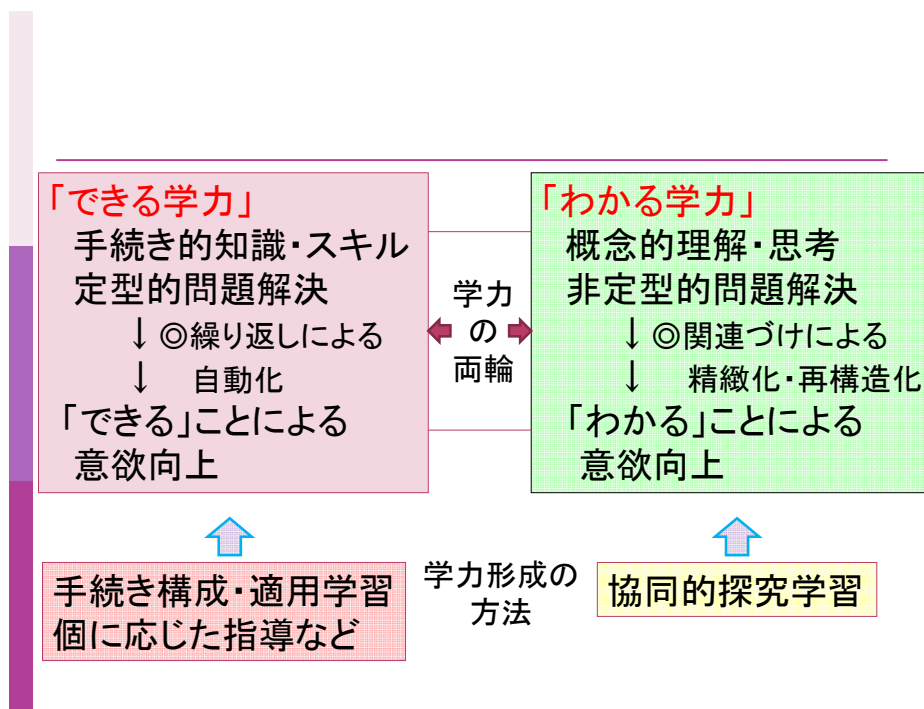


図 1-1 学力の心理学的モデル (藤村, 2012)

一方で、諸事象に対する概念的理解の深まりやそれに関連する思考プロセスの表現、それらを通じた非定型問題（多様な解・解法・解釈などが可能な問題）の解決や探究が「わかる学力」として想定されている内容である。たとえば、多様な解法が想定される（かつ当該単元の本質的理解を必要とする）算数や数学の問題に対して、自分なりに知識を関連づけて解決に迫り、その思考プロセスや判断理由を自分なりの言葉や図で説明したり、国語の文学教材に関して登場人物の心情の変化を、文章中の多様な情報を関連づけて推測し、それを根拠にもとづいて説明したりすることなどが例としてあげられる。

「わかる学力」形成の第1段階は、非定型問題に対して、自分なりに知識を関連づけて思考プロセスを何らかのかたちで表現することである。さらに、諸事象の本質をとらえて知識を関連づけて説明することで概念的理解を深めたり、本質的理解が必要な非定型問題を解決できたりすることが、「わかる学力」形成の第2段階として想定される。

「わかる学力」が形成されるメカニズム、すなわち、概念的理解の深化メカニズムは、多様な知識の関連づけによる知識構造の精緻化（*elaboration*）や再構造化（*restructuralization*）である。子どもがこれまでの日常経験や学習を通じて獲得してきた既有知識と新たな知識とを結びつけ、また既有知識どうしに新たな結びつきを見いだすことで、物事をとらえる枠組み（知識構造）を変化させていくことが「わかる学力」の形成（概念的理解の深化）の本質である。

このような「わかる学力」は、序章で述べたような「深い学習」や、それを通じて各個人に統合的に達成されることが期待される「思考プロセスの表現・共有」、「非定型問題の解決」、「深い（概念的）理解」といった、これからの時代に必要となる力にも対応する。

（2）学習指導要領における目標（資質・能力）などとの関連

以上のような2種類の学力の形成が、学校教育の中心的な目標となると考えられる。日本における学習指導要領などとの対応では、「できる学力」は、日本における現行学習指導要領（2008年改訂）にお

ける「基本的知識・技能」（2017年改訂の学習指導要領では「知識・技能」）に対応すると考えられる。一方、「わかる学力」は、学習指導要領（2008年改訂，2017年改訂）における「思考力・判断力・表現力」に対応すると同時に、さらに序章第3節で述べた、認知心理学研究が提案してきた「深い理解」も含むものである。学習指導要領（2017年改訂）では、学習内容を「深く理解すること」も重視されており、「わかる学力」には、その内容も理念として含まれている。さらに見方を変えれば、「わかる学力」は、先述のように、序章第1節で述べた、今後の「知識基盤社会」において重要な力となる「多様な知識を関連づけることを通じた非定型問題を解決する力」にも対応する。

なお、「できる学力」と「わかる学力」は、図1-1で示されるように「学力の両輪」として相互促進的な関係にあることが想定される。すなわち、「できる学力」の向上は、関連づけの対象としての知識・スキルを増加させることで「わかる学力」のさらなる向上に寄与し、一方で「わかる学力」の向上は、学習の文脈を豊かにし、知識やスキルの有用性を認識させることを通じて「できる学力」の形成を動機づけると考えられる（藤村，2012）。

（3）学習意欲や学習観の位置づけ

学習を動機づけ、前に進めるのが学習意欲である。学習意欲に関連する内容は、日本の学習指導要領（2008年改訂）では「学習に取り組む態度」のように表現され、学習指導要領（2017年改訂）では、さらに多様な他者と協同で取り組む態度なども含めた「学びに向かう力，人間性」のように表現されている。学習意欲を一時的に高めることだけであれば、ゲームや競争といった活動を導入することも有効かもしれないが、持続的な学習意欲は、先述の「できる学力」や「わかる学力」が高まっていくことと並行して向上していくと考えられる。

心理学的には、「できる学力」と「わかる学力」では、その形成を通じて高まる意欲の種類も異なると考えられる（図1-1参照）。「できた」という経験は、手続き的知識・スキルが自動化することで、より速く、より正しく答えようという意欲（定型的熟達化に対する志向性）を高めるであろう。そこには、他者との競争や以前の自分との比較が動機づけとしてはたらくかもしれない。一方で、知識を関連づけて「わかった」という経験は、知識が再構造化されることで知的好奇心や内発的動機づけが喚起され、もっとわかりたい、深く知りたいという意欲を高めるであろう。そこでは、①自分が考えを説明する相手として、②自分とは異なる知識の提供者として、あるいは③探究をともに進めるパートナーとして、協同する他者が重要な役割を果たすであろう（他者との協同の意義については、第3，4章を参照）。学校内外での「できる学力」や「わかる学力」の形成過程において、学習に対する個人の信念としての学習観（views of learning）も形成される（藤村，2008；鈴木，2013；藤村，2017）。学習観は、問題解決や理解、記憶などの認知プロセスをモニターし、制御するメタ認知（metacognition）の一側面であり、学習観の種類によって問題解決などの認知プロセスが影響を受けるという関係にある。

学校や学校外で、手続き的知識・スキルの獲得とその適用（できる学力）が過度に重視されると、「正しい解法と答えはただ一つであり、それを暗記し、思い出して書かなければならない」といった「暗記・再生」型の学習観が形成されると考えられる（藤村，2008）。そして、この「暗記・再生」型の学習観を強く持っていた場合には、以前に学習した手続きを適用することで解決できない非定型問題に対しては、解法を新たに考案しようとしないうちに無答（解答やそれに至るプロセスとして何も記述しないこと）となる可能性が考えられる。

一方、この「暗記・再生」型の学習観に対立するものとして想定される学習観が、概念的理解や思考のプロセスを重視する「理解・思考」型学習観である（藤村，2008）。「理解・思考」型学習観では、「解

や解法、またそれらの表現方法は多様である。自分自身の知識や他者が示した新たな情報を活用しながら自由に考えを構成し、そのプロセスを自分のことばや図式で表現して他者と共有することが学習である。そして、そうした知識の構成プロセスを通じて物事の本質を理解することが重要である」と考える。個々の児童・生徒において、「わかる学力」が高まると、その向上に寄与した学習方法の有効性についての意識が高まり、「理解・思考」型学習観も形成されることが想定される。

（４）「できる学力」と「わかる学力」をいかに高めるか

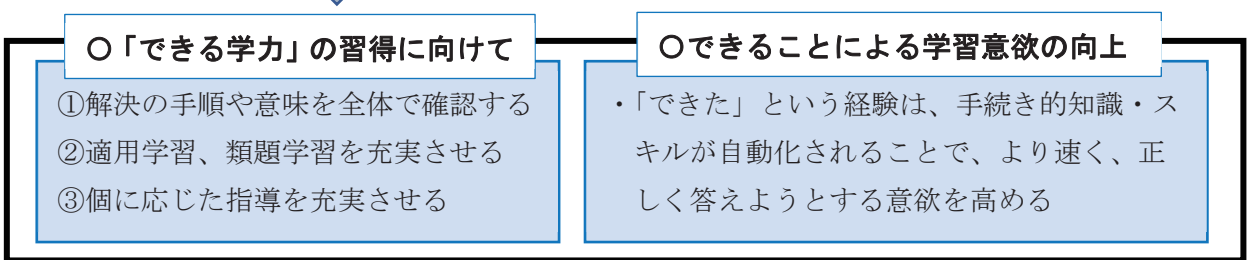
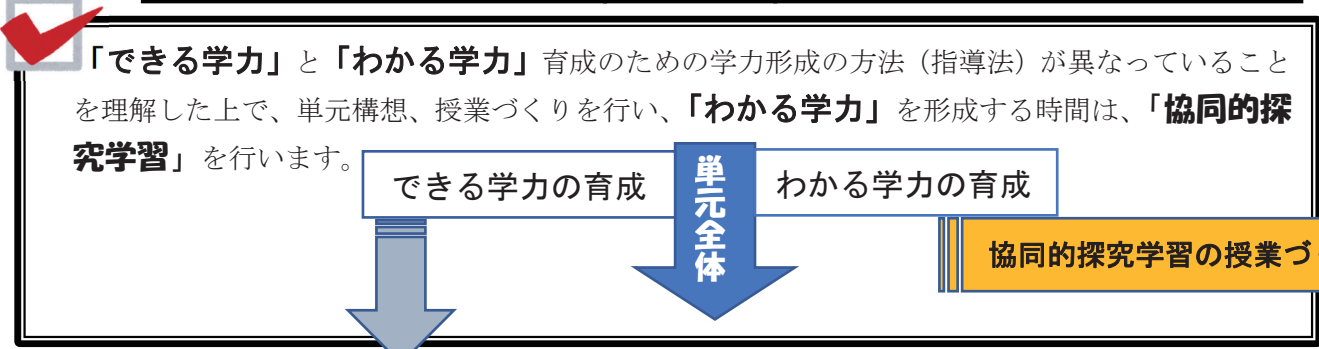
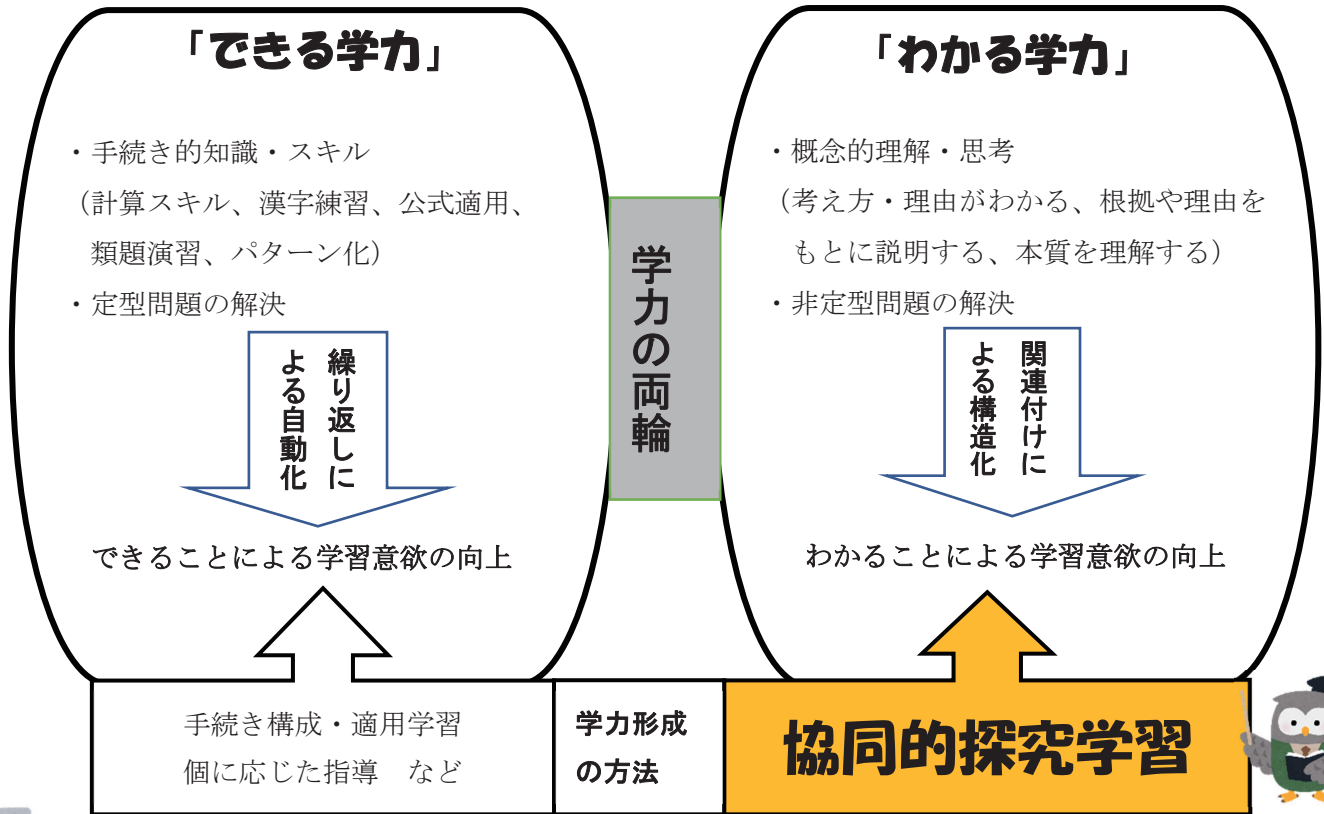
本節で述べてきたように「できる学力」と「わかる学力」では、学力形成の心理学的プロセスが異なるため、それぞれの形成のために有効な学習方法も異なってくる（図 1-1 参照）。

「できる学力」の形成に関しては、先に述べたように、反復による自動化が一定程度、必要である。そのため、一連の手続きについて、例題等に対する教師と子どもたちとの対話を通じてクラス全体で確認した後に、個々の子どもがその手続きの適用練習を行うような学習（手続き構成・適用学習）や、それぞれの子どもの手続き的スキルの獲得を確実にするための少人数指導などの「個に応じた指導」など、従来、日本の学校で行われてきている学習方法が有効性を持つと考えられる。実際に、手続き構成・適用学習に「個に応じた指導」の一形態であるティーム・ティーチングを組み合わせた学習方法による小学校算数の継続的授業が、小学校中学年の算数に関する「できる学力」の向上などに有効であることが示されている（藤村・大田，1996）。

一方で、「わかる学力」の形成には、先に述べたように、多様な知識を関連づけることによる知識構造の精緻化や再構造化が重要となる。特に「わかる学力」の形成に関して、第1段階の「思考プロセスの表現」とどまらず、第2段階の「概念的理解の深まり」やそれにもとづいた「非定型問題の解決」を達成していくためには、子ども自身が多様な知識を関連づけて知識構造を（より本質的な目標に向けて）再構造化していく必要がある。そのためには、多様な考えが可能で教科や単元の本質に関わる非定型問題に対して、一人ひとりの子どもが探究を通じて自分自身で知識を関連づけること（個別探究）や、クラス内の他者との協同過程、特にクラス全体での協同過程を通じて自分や他者のもつ多様な既有知識を関連づけること（協同探究）、さらにそれを活かして一人ひとりの子どもが探究を深めること（再度の個別探究）を組み込んだ学習方法である「協同的探究学習」が有効性を持つと考えられる。「わかる学力」を高めるための「協同的探究学習」の理念やプロセスの詳細については、第2章で詳述する。

それでは、日本の子どもには、「できる学力」と「わかる学力」に関して、どのような特徴がみられるだろうか。序章では、最近の国際比較調査の総得点や順位の点から日本の学力をみたが、次節では、各調査に含まれる具体的問題とその結果にもとづいて、日本の子どもの学力を心理学的に分析してみよう。

心理学の観点からの学力モデル



わかる学力を高める協同的探究学習の4つの特質

- ① 多様な既有知識を活性化する「非定型問題」（導入問題、展開問題）
⇒ 思考の多様性、日常性、主体性
 - ② 一人ひとりが多様な知識を関連づける「個別探究」場面
⇒ 自己内対話、自己の既有知識との関連づけ、思考の過程の表現
 - ③ クラス全体の「協同探究」における多様な考えの関連づけと本質追究
⇒ 学級全体による対話、クラス全体での関連づけ
 - ④ 「再度の個別探究」場面
⇒ 協同探究場面の多様な考えの活用、理解の深まり
- 問いで深める

協同的探究学習の進め方（授業の流れ）

1. アプローチ

導入問題



○一人ひとりが多様にアプローチでき、多様な考えや解法が可能な問題

- ✓ 多様性・日常性
- ・多様な知識を関連づけ、自分なりに解決可能な問題を提示する
- ・主体的に解決できる問題を提示する

2. 自己説明

個別探究①



◎思考のプロセスを重視する

- ・根拠や理由、自分の考えをもつ

- ✓ じっくり考える時間の確保
- ・個々の考え、解法を深める時間を確保する
- ・多面的な考え、多様な解法を発見させる
- ・個人内で既有知識と関連づけさせる

3. 関連づけ

協同探究



◎クラス全体で、多様な考えや解法の発表と関連づけを行う

- ・共通点、相違点、根拠や理由、気づきを出し合う
- ・追究型発問で深める

- ✓ 個人間や既有知識との関連づけ
- ・児童生徒の言葉や表現を尊重し、クラス全体に対して根拠や理由を説明させる
- ・教師が整理するのではなく、児童生徒が違いや共通点に気づくように支援する

4. 本質理解

展開問題 個別探究②



◎協同探究場面での意見・考えを生かし、自力解決を行う

- ・学習内容の本質・ねらいに迫る

- ・学習内容の理解の質を高める
- ・協同探究場面で整理された、いくつかの考えから選択・統合し、学習内容の理解を深めさせる

👑 わかることによる学習意欲の向上

- ・知識を関連づけて「わかった」という経験は、知識構造が再構造化されることで知的好奇心や内発的動機づけが喚起され、もっとわかりたい、深く知りたいという意欲を高める

※ 加古川市教育委員会編集の協同的探究学習授業アイデア集を参考に作成しました。

第2章 本校の実践紹介

1. 国語総合（現代文 高校1年生）

（1）目的

高等学校国語科現代文における協同的探究学習を、様々分野にわたって取り組んできた。その取り組みの過程とその効果について報告する。

協同的探究学習法は、生徒の既有知識を使った多様な解法がある記述課題を設定し、その課題の概念理解を自分なりの方法で理解することを図るものである。「個別探究Ⅰ」でまず自分自身で答えを考え、「協同探究」でグループやクラス全体でその課題について討論し、その討論を通してその課題を自分なりの理解するための多面的な考えや因果の深さを知り、「個別探究Ⅱ」で全体討論を踏まえて課題の答えをもう一度書くという形を取る。

現代文における協同的探究学習、特に「評論文」に属する文章を扱うにはこの学習法とそぐわない部分がある。それは、「評論文」が、筆者のある考え方を述べる文章であり、その意味で「多様な解法」を持つことができないのだ。そのような文章の制約がある中で、概念理解を目指した多様な解法がある課題をどのように設定することができるかが難しいところである。

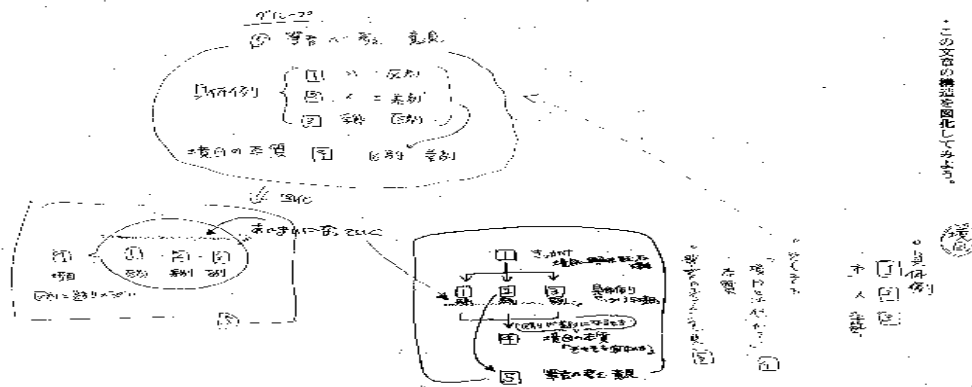
（2）実施方法と内容

今回使用した題材は高校1年生の教科「国語総合」の現代文分野の最初に載っている川上弘美の「境目」という文章である。段落の分かれ目がはっきりしており、文頭に内容を示す言葉が書かれていることもあり、段落の内容を把握しやすい。しかし、それぞれの内容を踏まえてどのように段落構成を考えるかは、内容をしっかり読まないと迷う文章である。段落構成を表現する方法として図化させることで、それぞれのくくりの違いを検討しやすいと考えて「この文章を図化してみよう。」という課題を設定した。

授業展開は以下の通りである。

- 1) 教科書の難語句の意味確認と全文通読、1～3段落の内容理解をそれぞれ確認させる。
- 2) 4、5段落内容を理解させ、全文の構成について個別探究Ⅰを行う。
- 3) 協同探究（グループ→全体）と個別探究Ⅱを行う。

(3) 検証評価



今回の取り組みを行った生徒のプリントのうち、効果的に協同的探究学習を行ったことがわかるものを取り上げ、その効果について解説する。

上記のプリントのうち、右下の記述は「個別探究Ⅰ」のものである。図化といっても1と2と3を縦に並べ、4と5をその左側に書き、短い言葉か単語でその説明が記されているだけのものである。漠然とではあるが、自分の考えが書かれており、生徒が今ある知識を基に答えを考えている。

上半分の記述とその左下の記述は「協同探究」の時のメモである。グループでの話し合いのメモでは、もう少し詳細に全体の構成を書いたものが見られる。自分が自分の考えにないものを取り入れた全体がよくまとまったメモが書かれている。通常4人一組でグループ討論を行うが、必ずそれぞれが自分の考えを述べることでわからないことがあれば必ず質問をすること、全員の考えを聞いた上で一番納得できる考えをグループの意見として発表する（全体討論の意見とする）ことを取り決めとして討論させている。自分の意見を発言することで、自分自身の考えを整理する機会とし、必ず討論に参加せざるを得ない状況を作り出している。また、わからないことをわからないと素直に言える状況でもあるので、課題を難しいと感じる生徒にも討論に参加しやすい環境を作る意味でも人数の少ないグループ討論を設定する意味がある。

左下は全体討論のメモである。1から3までの段落が進展する際の内容の変化の意味づけが書かれている。全体討論時には様々な意見が出るが、出た意見を「共通点」と「違い」という観点で比較検討させることで本質と多面性を確認させることができる、また、板書を見ながら考えさせるので、それぞれが自分のペースでじっくり検討することができるのも有効である。

下段の中央に濃く書いてある記述が、個別探究Ⅱの記述である。最初と比べるとかなり詳細な図になっている。自分の考えを基にしつつ、グループ討論や全体討論を通して、自分の考えの精緻化が図られていることがわかる。出された課題について、自分の一番納得のできる方法でもう一度記述するからこそ精緻化できるのである。

このような記述は、他の生徒のプリントにもよく見られる。各生徒図化の方法はそれぞれ違うが、自分の納得できる方法でこの文章の構成を考えていることがわかる。このように、協同的探究学習は、自分の考えを他の生徒と討論を重ねる中で精緻化させることができる方法であることがわかる。

2. 国語・現代文B（高校2年生）

「評論文における協同的探究学習の試み—具体例を挙げさせる」

（1）目的

現代文で扱う教材は、多くの生徒にとって母国語である日本語で書かれているため、読むことができる。そのため、ある程度問いに関しては、本文の表現を切り貼りすることでそれらしい「解答」が準備できると感じている。しかし、本当に内容が理解されているのか、わかっているのかという疑念があった。そこで「協同的探究学習」を用いて、生徒自身が理解する—「わかる」こと—を目指した。

（2）実践方法と内容

今回扱った教材は、高校2年生の「現代文B」で採択されている丸山圭三郎の「ロゴスと言葉」という評論である。多くの高校生にとって、言語論は読み慣れておらず、言語という抽象概念を言葉で説明されることに難しさを感じやすい。また、「ロゴス」や「分節」など日常的には使用頻度の低い語も頻出するため、実感を伴った内容として響いてこない。そこで、生徒が本当にわかっているかを判断するために、具体例を挙げるという方法を用いた。私たちが、他者に理解をしてもらうために、具体例を示すことはよくある手法である。しかし、具体例を示すことは、文意をしっかりと捉えていないとできないと思い、生徒の理解度がわかると考えた。

【実際の授業での取り組み】

導入問題・個別探究①

本文の「世界のロゴス化とは、それまで分節されていなかったマグマのごとき生体験の連続体に区切りを入れて、これを観念なり事物なりのカテゴリーとして存在せしめることなのである。」とは、どういうことでしょうか。今、隣に座っているクラスメイトがわからないと言っていると仮定します。わかりやすく説明するとしたら、どのような具体例をあげますか。ちなみに、本文でも具体例が示してあります。「具体的にいえば、日本語を母国語とする人々に、『犬』と『狸』が別の『動物』であるような意識を生ぜしめたり（フランス語ではいずれも chien と呼ぶ）、『蝶々』と『蛾』を別の『昆虫』であるように思いこませたり（これまたフランス語では同一の名称 papillon でしかない）すること、さらにはメタ的レベルにたつ『動物』とか『昆虫』というクラス名で、それぞれ『犬』と『狸』、『蝶々』と『蛾』を同一カテゴリーにまとめることを可能にするものは、言葉の力以外のなにものでもない。」…この例でわかりますか？わかりにくいですよね？では、どんな例が良いでしょうか。考えてノートに書きだしてください。

協同的探究

隣同士で、実際に考えた具体例を用いて説明をしてみましょう（この時、列で説明する側、説明される側を指示したクラスもある）。…どうでしょうか？今、隣の子の説明でわかった！という人、手を挙げてください。

（挙手した生徒を指名し）どんな具体例を挙げてくれましたか。

（挙がった例を板書し、クラス全体に対してどういう説明だったかを発表させる。）

実際の授業では、「チンパンジーとボノボ」や「人間をイケメンと不細工に分ける」といった例が出てきた。

展開問題・個別探究②

自分で出した具体例、もしくは自分が納得できた例を使って、「世界のロゴス化」とはどのようなことか説明してください。

(3) 検証評価

導入問題では、まず「犬」と「狸」の写真を用意し、教科書の例をイメージさせやすくして取り組みやすくなるよう考慮した。さらに工夫した点としては「今、隣に座っているクラスメイトがわからないと言っている」と仮定したところである。そうすることで、教科書の表現をアレンジしたものではなく、自分と同じような経験、語彙を持つ生徒にとって実感の伴う具体例を探ししてくれることを期待した。

協同的探究の場面では、身近に感じる例を挙げられた生徒がいた一方、例が思いつかずにいた生徒への支援が少なかったため改善すべきところはあった。ただ、どのクラスにおいても、良い例が挙がってきたので、それを足掛かりに理解を深めた生徒が見られた。協同的探究によって既存の知識と関連づけ、「わかる」経験を得られたと考えている。

そして、展開問題において、今回の主眼である「世界のロゴス化とは、それまで分節されていなかったマグマのごとき生体験の連続体に区切りを入れて、これを観念なり事物なりのカテゴリーとして存在せしめることなのである。」とは、どのようなことか、自分の挙げた具体例を改めて抽象化して捉えなおす作業をさせた。これによって、生徒自身が本当に理解しているかを生徒自身に「見える化」した。

しかしながら、今回の実践において改善すべき点は、最後の展開問題である。もう一度抽象化させることで、本質を捉えているかを確認したかったのだが、結局、本文の表現のままになってしまう生徒が少なくなく、理解度を明確化できなかった。最初と比べて理解が深まっているとは思うのだが、それが表現されるような形で説明するような仕掛けを考えると良かったと思う。例えば、「自分の挙げた例について、『分節』というキーワードを用いて説明する」など、同様の意味を持つ別の単語を指定するといった工夫をする必要があると感じた。

3. 世界史A (高校1年生)

歴史系教科では、過去という動かさない事実を学ぶことが中心となる。授業時の発問やペーパーテストなども、獲得した知識の定着度を問うものとなり、記憶・暗記が学習の本質であるという誤解がされてきた。そのため歴史事実の理解の上に、因果関係や相互関連性などを問い考えさせることのできる教材を用いて「協同的探究学習」を行った。

今年度は高校1年生の世界史Aの実践を以下、紹介する。複数の史資料を載せたプリントを用意し、史資料から読み取れることについて個別探究の後、全体で共有し(協同探究)、その後発展問題について個別探究する型式をとった。題材として、「国境線から考えてみる」「ドイツの統一」「20世紀前後のジャワ社会」「20世紀前後の東アジア」を設定して協同的探究による授業実践を試みた。

「国境線から考えてみる」「ドイツの統一」は、ともに近現代史を考える上でキーワードとなる「国民国家」についての理解を深めることをねらいとして実践した。前者の取り組みでは、国境線の問題(自然地形に基づくもの/人為的なもの)からアプローチをした。ただ初回のガイダンス的な授業で行ったため、個別探究を深めるところまで進めることはできなかった。後者の「ドイツの統一」はフィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』やビスマルク『鉄血演説』の歴史史料の他、フリードリッヒ=リストの伝記を入れたり、日本における明治維新も参考にさせたりすることで、国民国家の具体的要件を意識させることができた。発展問題については「ほかの国ではどうか」という問いを設定したが、いまひとつ深まらなかった。

「20世紀前後のジャワ社会」「20世紀前後の東アジア」では、欧米列強の植民地支配による矛盾と同時に、植民地支配によって植民地の知識層が新しい視野を与えられ自国の矛盾に気づいたことに気づかせることをねらいとして実践した。「20世紀のジャワ社会」では、カルティニの書簡を用いて、植民地支配の問題、ジャワ島における身分制度・女性差別の問題に気付かせ、発展問題として「どうすればこの問題改善できるか」という問いを設定した。これに対して、回答としてねらっていた「教育の必要性」まで踏み込んだ記述がいくつかあり、発展問題の設定としてうまくいったことが確認できた。インドにおけるラーム=モーハン=ローイやフィリピンにおけるホセ=リサールも、同じような動きをした知識人としてとらえる枠組みをつくることがこの実践の結果できたのではないかと考えている。「20世紀前後の東アジア」では、「欧米の植民地支配の進行に対して、日本と清の道を分けたものはなんであったか」を発展問題におきつつ、清の欧米列強への対策を個別探究・協同探究で考えさせてそのステップとした。

実践において苦労したのは、発展問題をどう設定するかであった。歴史事象は一時的なものである以上、例題→問題というわけにはいかない。ご指導いただいた藤村先生からは、「国境線」の際には「地形によって国境が引かれるメリット」を問うことで紛争が起こらない一因を考えさせることができる、「ドイツの統一」では「なぜこの時期に統一する必要があるのか」を問うことで、英仏の存在、後発国の危機意識・葛藤とその共通性を考えさせることができるのではないかとコメントをいただいた。協同的探究による関連づけを発展問題の個別探究によって抽象化し、本質の理解へ向かわせるというのが協同的探究法の勘所と思われるが、その時代におけるその事象が発生した必然性と共通性を発展問題に据えながら教材を探していくというのが、目下目指すところである。

ドイツの統一 (教科書 p. 121)

1. 統一 (1871) 以前、ドイツはどへいったことになっていたのか?

8~9世紀	フランク王国 → 843年以降、分裂
962-1806	神聖ローマ帝国 (オットー1世戴冠 (962年)) → 13世紀以降、(領邦国家) が分立する状態に
1806-13	ライン同盟 (プロシヤ、オーストリア、バイエルン) (ナポレオン) を盟主とする西南ドイツ領邦の同盟
1815-66	ドイツ連邦 (プロシヤ、オーストリア) 議長国オーストリア 独立した君主国家と自由市で構成

2. 分立している (2 領邦国家) をまとめる・統一するためには、どへいったことをしたらよい (どへいったことが必要) と考えますか? (右の資料や日本のケースを参考に考えてみましょう)

教育の言語や歴史を統一することで国家の正統性を認識させ、統一と統治体制の必要性を個人レベルで植え付けることで中央政府への帰属意識を高める、価値観の統一

多数の国家間で共通のルールをつくることで同じ集合に属することを認識させる。憲法
開港場、経済的つながり

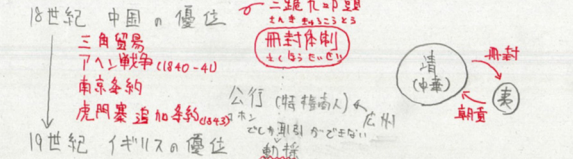
20世紀を目前に、ジャワジャ若者たちは何を考えていたのか (教科書 p. 136)

カルティニ [Reden Ajang Kartini] 1879 - 1904
インドネシアの女性で、民族主義運動および女性解放運動の先駆者。中部ジャワのジェバワ地方の領主ソロニングラットの娘で、祖父が開明的な人物だったため、幼時から家庭教師によりオランダ語の教育を受けた。またオランダ人小学校に入学を許されたが、12歳で卒業した後、婚約相手の慣習に従って家庭内に引きこもった。その間、多くのオランダ語の書を読み、同僚のジャワ人と女性の民族的自覚の向上につとめた。1902年にはジャワの娘を対象にした私塾を開いた。1903年にランパン知事ジョアデニングラットと結婚したが、その翌年に産褥熱により25歳で死去した。彼女のオランダ人の友人に宛てた手紙が出版されて広く知られるようになり、その収益でカルティニ基金が設けられ、各地にカルティニ女学校が開校された。1964年には「国家独立英雄」に列せられ、誕生日の4月21日は「カルティニの日」として祝賀行事が催されている。

1. 当時のジャワ(インドネシア)の社会にはどのような問題があったのか?
- 差別的な伝統慣習があること (西洋文化の導入により明らか)
 - オランダに植民地支配をされている、差別を受けていること
 - 強制栽培による飢饉の増加 (食料不足) (オランダに依存する差別)
 - 男女差別
 - 教育の普及が進んでいないこと
 - オランダ人にオランダ語を返す → 左遷 (上下関係・礼儀)
2. なぜこの時期にジャワを始め、東南アジアの若者たちは、自国の問題を意識し、立ちあがろうとしたのか?
西洋の思想を学んだ若者たちが自由や平等という概念を自覚し、自らも運動を起していこうと思ったから。
(民族主義・女性解放主義)

二十世紀 (目前東亜細亞) 旗手 (教科書 p. 138-145)

1. 18世紀、中国とイギリスの関係はどのようなものであったか?



2. 外国の影響を受ける中で、清朝政府はどのような政策をとったか? またそれはどのように変化していったのか?

軍備の近代化、西歐化 (集約はそのまま、不十分) 「洋務運動 (中法而用)」
↓
日清戦争の敗北
↓
民族の自由を比較的に認めさせた政策 (日本参考) 「変法運動 (憲法自選)」
(皇帝の独裁体制を弱める経路?)

3. 「西洋の衝撃」を受けた日本と中国の道を分けたものは、何だったのだろうか?

根本的な体制の改革の時期。産

Ⓐ 対西戦争 → 軍備強化 → 対日戦争 → 体制改革

Ⓑ 対西条約 → 軍備 + 内乱の後「新政府」に → 対中戦争
つとまらな。日本が早く産業改革 ⇒ 豊。勝利。列強。産業改革

4. 英語・コミュニケーション英語（高校1年生）

（1）目的

高校1年生の授業で「協同的探究学習」を取り入れた辞書指導を行った。本校は併設型中高一貫校であるため、高校1年では、附属中学校からの内進生80名に、外進生40名が新たに加わる。内進生、外進生でクラスを分けることはせず、同じクラス内に内進生と外進生が混在する。そのため、高校1年生にとっての、大きな関心事は、1) 新しい学習環境に慣れることがまず挙げられる。また、英語の授業だけではなく、多くの授業内容が中学の時に比べ高度化するため、2) 高校での授業内容に対応できるかどうかも大きな関心事となる。

1) に関しては、協同的探究学習を通じて、クラスの中で、友人関係を築くきっかけができ、そのことが、新しい環境へ適応できるという個人の自信につながり、結果としてクラスへの満足感が構築されると考える。

2) に関しては、中学英語から高校英語のつなぎをゆるやかにを行うため、教科書学習に先立ち、学習英語辞書指導を通じ、生徒が「言語としての英語」や「英語を取り巻く文化」への関心が向上し、「英語を習得したい」という意欲や「高校英語に対する前向きな意識」が向上することで、高校英語へソフトランディングが可能であると考えられる。

（2）実施方法（指導計画 辞書指導 全10回）

第1限	オリエンテーション	・高校英語の概要説明 Preアンケート 教員こだわりマップ
第2限	自分を紹介しよう	・こだわりマップ
第3限	自分の辞書を紹介しよう	・おすすめ辞書カタログ
第4限	辞書の暗号読解	・辞書で使われる記号の理解 問題作成
第5限	辞書の暗号読解	・解答作成 発音記号
第6限	辞書の不思議	・解答作成 単語のイメージ 動詞編 前置詞編
第7限	辞書の不思議	・文法編 コラム編
第8限	辞書の力	・ポスターセッション準備
第9限	ポスターセッション	
第10限	Postアンケート	

（3）内容

書店で各自紙辞書を一冊購入することを春休みの宿題として、生徒に課した。ただ単に購入するだけでなく、なぜその辞書を購入しようと考えたかについて簡単なレポートにまとめさせた。全10回の辞書指導で、第4限(辞書の暗号読解)～第7限(辞書の不思議)の授業で「協同的探究学習」を取り入れた。

第1限(オリエンテーション)～第3限(自分の辞書を紹介しよう)までは、仲間作りを主眼において授業を行ったため、「協同的探究学習」は行っていない。また、第8限(辞書の力)と第9限(ポスターセッション)は、辞書を書店で初めて購入する高校生に魅力的に映る辞書のカバーや宣伝文句、内容紹介をグループで考案させ、それを発表させた。

(4) 授業案の例 (第4限 辞書の暗号読解)

0) 授業環境づくり

第3限(自分の辞書を紹介しよう)の中で、優れた発表をした生徒にモデル発表をクラス全体の前で行う。また、優秀プレゼンテーション賞として賞状を授与する。

1) 個別探究Ⅰ：個人での暗号探し(10分)

自分が春休みに購入した辞書の中で使われている辞書記号を抜きだし、配布した一覧表に書き出す。

2) 協同探究Ⅰ：グループ内で各自が調べた辞書記号の共有(5分)

どの辞書にも共通して記載されている辞書記号の共有(5分)

特定の辞書にしか記載されていない辞書記号の調査(5分)

グループ分けをする際、同じ辞書を持っている生徒がなるべく同じグループに属さないように配慮する。

3) 個別探究Ⅱ：自分が購入した辞書の特性や特徴を考える(10分)

(5) 検証評価 各尺度の対応のある t 検定の結果と内進生・外進生の2要因分散分析の結果

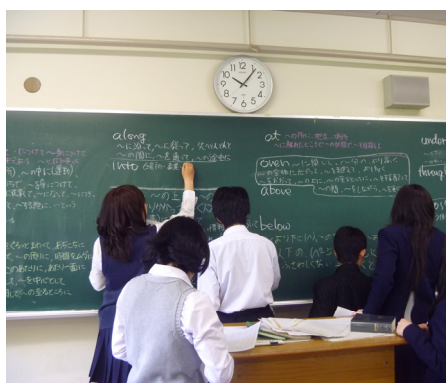
	事前	事後	t 値	自由度	有意確率
クラスへの評価	3.53 (0.78)	3.60 (0.78)	-1.62	120	0.11
クラスへの親和性	3.36 (1.07)	3.64 (1.04)	-4.39	120	0.00**
クラスへの介入	3.86 (0.75)	3.95 (0.73)	-1.99	118	0.49*
自己受容	2.94 (0.85)	2.94 (0.89)	0.00	117	1.00

* $p < .05$ ** $p < .01$

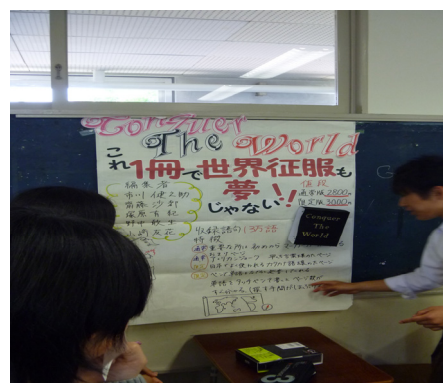
		内進生			外進生			事前事後の主効果	交互作用
		n	M	SD	n	M	SD		
クラスへの評価	事前	80	3.40	0.76	41	3.77	0.77	2.14	0.04
	事後		3.48	0.77		3.83	0.76		
クラスへの親和性	事前	80	3.57	1.00	41	2.94	1.09	26.24**	7.178**
	事後		3.74	1.03		3.46	1.04		
クラスへの介入	事前	78	3.82	0.76	41	3.96	0.74	2.3	1.46
	事後		3.94	0.72		3.97	0.77		
自己受容	事前	77	2.79	0.86	41	3.21	0.77	0.13	1.35
	事後		2.83	0.90		3.13	0.85		

* $p < .05$ ** $p < .01$

t 検定の結果「クラスへの親和性」「クラスへの介入」については、事前調査と事後調査の間に有意な差が認められた。他方、「クラスの評価」「自己受容」に関しては有意差が認められなかった。2要因分散分析の結果「クラスへの親和性」尺度に関して、外進生と内進生で有意な主効果と交互作用が見られた。



第6限 辞書の不思議 前置詞編



第9限 ポスターセッション

5. 英語・コミュニケーション英語（高校2年生）

「個を皆で深める授業プログラムの開発」

1 目的

本研究の目的は、英語教育において、異文化コミュニケーションの基本となる「自分とは異なる社会集団とも人間関係を構築する能力」を身につけるための「協同的探究学習」を取り入れ、他者とコミュニケーションをとりながら協同して問題解決する学習方法を開発する。また、学校カリキュラム全体を暗記・再生中心の教育方法から論理的な思考力や表現力の育成を重視した理解・思考型学習方法へと変換することを目的とする。

2 実践方法

昨年度、高校3年生徒120名を対象に協同的探究学習の授業実践に取り組んだものを高校2年生徒120名の授業実践に応用した。主に、教科書をベースにした英語の授業を通し、言語活動の充実を図る目的で各レッスンにPISA型読解力におけるオープンエンドの課題を設け、ペアやグループによる協同的な取り組みを実践した。

3 内容

本研究は以下の手順で進めるものとする。

- (1) コミュニケーション英語の授業内で各レッスンにオープンエンドの課題(PISA型読解力の課題)を設け、テキストの正確な理解に基づき、その前提としていること、背景にあることを推論させる。そして、推論を積み重ねて、テキストを深く理解させる。さらに、テキストの深い理解に基づき、その内容や形式を批判するといった活動へと展開する。
- (2) (1)の発展的な課題として、国際的素養を身につける目的に沿った個人での探究内容を考えさせる。表現の多様性、日常性、テーマ性も含め、生徒が多様なアプローチで自身の考えを英文で構成することができるよう支援する。〈個別探究Ⅰ〉
- (3) 個別探究Ⅰにおいて英文で構成した各自の考えをグループ内で発表させる。グループ内での質疑応答を行う代わりに、所定の質問用紙に英文で質問をすることによる発表者へのフィードバックをする。また、質問内容について生徒が自発的に口頭で意見交換をする。〈協同探究Ⅰ〉
- (4) 協同探究Ⅰを通して生徒がお互いの意見を知り、他者との意見の共通点や相違点を考えながら知識を関連づけ、自らの発表の修正をさせる。〈個別探究Ⅱ〉
- (5) 協同探究Ⅰと異なるグループメンバーと修正された探究内容の発表を行い、再度、質問用紙への記入をすることで、自らの持っている知識と他者が持っている知識を活用しながら、探究内容の結論としての問題解決方法を考察させる。〈協同探究Ⅱ、個別探究Ⅲ〉
- (6) (5)で各自が取り組んだ探究内容をクラス全体で代表の数名に発表させる。また、個別で発表者への質問記入することでフィードバックを行う。最後に、全体で口頭による質疑応答の時間を設ける。〈協同探究Ⅲ〉
- (7) (2) (4) (5)における各個人の探究内容の変化を分析し、論理的な思考力や表現力の育成を重視した効果的な理解・思考型学習方法について検証する。

実践導入例

時間	配分	活動内容
	5分	①Q&A用紙×班員数 ②(付箋×3)×班員数 ③Editing Checklist×班員数 ・グループリーダー⇒教員より①～③受け取り⇒班員に配布
	18分	・グループ内発表=タイマーに従い行う 2分(発表)+2分(質問作成)+30秒(付箋→発表者&準備)
	10分	・最終原稿(Essay 2)をQ&A用紙の質問内容を反映させ作成 ・Editing Checklist(Self-Edit)の各項目を自分でチェック
〈コの字型体系へ移動〉		
	5分	・Editing Checklist(Peer-Edit)の各項目を隣同士でチェック ・黙読し、相手の原稿の不明な点に赤線をいれる
	9分	全体発表者(2名予定) ・2分(発表)+2分(質疑応答)+30秒(移動&準備) ・発表者=タイマーに従い行う ・オーディエンス=質問(Why)を考えておく⇒質問(発表後の2分間で)
	3分	・まとめ/振り返り

4 検証評価

協同的探究学習を取り入れた授業を通し、生徒は教科書の内容からオープンエンドクエスチョンをつくるという作業から、各自の探究内容をうけての答えがすぐに出ないオープンエンドクエスチョンを考えるようになった。

このように、英語という既存教科に「協同的探究学習」を取り入れ、自分の持つ知識と、その思考プロセスを他者に表現し、他者と思考プロセスを共有することによって問題の本質を理解し、問題解決にあたる学力を育成していく必要があると考える。

本実践で活用した協同的探究学習の方法を導入することにより、個別での探究学習がグループという集団の力により深まっていく一定の効果をみる事ができた。今後も、「手立て」としての協同学習ではなく、生徒が主体となり教師はファシリテーターという「考え方」を授業に積極的に取り入れ、更なる言語活動の充実に向けた授業展開を継続していきたい。

6. 美術（高校1年生）

（1）目的

身の回りの事象や対象を深く見つめる中で、他と関わりながら自己の感性や想像力を高め、豊かに発想し構想する能力を伸ばす。

（2）実施方法

高校1年美術 後期（9月29日） デザイン・工芸分野 「ランプシェード（照明）のデザイン」の導入部において、40名を4人ずつの10グループに分けて、異縁連想を使って他と関わりながらアイデアを出し発表させる。

異縁連想のデザインワークとは・・・

- ① 動詞（積む、ひねる等）のワードが書かれた紙が入った箱、名詞（メモ、傘等の言葉）が書かれた紙の入った箱の2つを用意する。
- ② 2つの箱から1班それぞれ1枚ずつ、生徒に引かせる。2つの言葉が合わさって偶然にできた言葉（積む・メモ、ひねる・傘等）から想像を広げ、デザインを考える。

（3）内容

導入部でプロダクト（製品）デザインの様々な発想例を鑑賞させた後に、異縁連想デザインワークで使う発表用画用紙・サインペンを各班に配布する。各グループの代表者に、文房具と言葉（動詞）の書かれた紙片のくじを引かせてグループに持ち帰り、自分たちのグループに与えられた課題を知らせる。次に異縁連想の方法をパワーポイント資料を見せながら解説する。グループに与えられた課題を、まず5分間、個人で言葉（動詞）と文房具が合わさって思いつくアイデアを考えワークシート（写真1）に書かせる。5分後、それぞれのグループで個人発表をして、次にグループ内で、意見を出し合い、一つのアイデアに絞り込み、発表用画用紙にまとめる。その後、各班でまとめた発表用画用紙（写真2）を、他グループの前で見せながらグループのアイデアを発表させ感想を書かせた。最後に感想を発表させ、本時のねらいにせまる生徒のキーワードを取り上げてまとめた。

デザインの発想（アイデア）について

1. デザインの発想のいろいろ

- ① () をくつがえす。
- ② () の要素をプラスの要素に変える。
- ③ 使う場所や使う人の () を考える。

2. 異縁連想による発想（個人で考える）

動詞	×	文房具	商品名
<input type="text"/>	×	<input type="text"/>	<input type="text"/>

① 関連する言葉をいろいろ思い浮かべる。

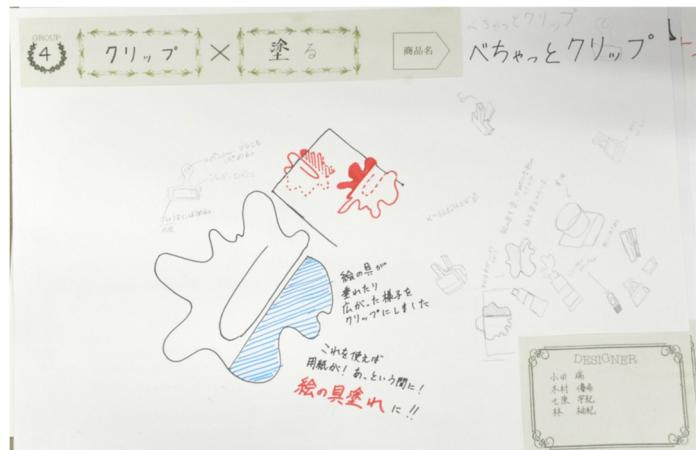
<input type="text"/>	して	<input type="text"/>	(作る)
----------------------	----	----------------------	------

② ... 作るということば ...

材料は

図解

個人用ワークシート（写真1）



発表用画用紙（写真2）

「絵の具がこぼれて、紙に垂れたように見えるクリップ」

(4) 検証・評価

授業では、他と関わりながら自己の感性（美しさや良さを能動的に感知する力）や想像力を高めることをねらいとした。その授業目標に照らし合わせて、授業で使用した個人ワークシートの個別探究の取り組みと授業後の感想及び授業観察をもとに生徒の変容を観察・評価することにした。評価項目は、1) 他との関わりの中で感性が磨かれたか。2) 取り組み意欲・関心が高まったか、の2点とした。

1) 他との関わりの中で感性が磨かれたか。

個人としての既存の感性（デザインの発想の良さを感知する力）がグループワークでより磨かれたかという点を評価した。ワークシートに書かれ個別探究の欄を見ると、ほとんどの生徒は、キーワード（動詞）をもとに多様な発想をしており、個人がテーマをもとに想像して作品のアイデアを考えるより、キーワード（動詞）という取っ掛かりがあった方がスムーズに連想が進んだ。また、他の生徒の発想に共感したり、ヒントを得たりしながら、行き詰まった自分の発想を修正したりしていた。生徒も見られた。生徒の授業後の感想からは、「何にも関係のなさそうなことを組み合わせると面白いものが生まれることがわかった。何かのパロディーから発想させても面白いかも」「二つ以上のはたらきをくっけるといい」など、前向きな感想が見られ、新しい発想法に気がついた生徒もいた。生徒個々の既存の感性のうちの一般的な感性（多数の人が美しい・良いと感じる感性）が集団の作用によって、磨かれ、広がっていくことが分かった。

2) 取り組み意欲・関心が高まったか。

個人で考えたデザインの発想を持ち寄り、グループで一つにまとめ上げる作業では、控えめな生徒の意見が取り上げられにくく意欲の低下が心配されたが、最初の5分間に個別探究のプロセスを入れることによって、集団の中で埋没する危険性はなくなった。通常授業で個人での発想を練る作業に比べて、グループワークでは、自分の発想を他の人と比較する機会があり、自分の発想に自信がなく、あきらめがちだった生徒も、他に引っ張られて取り組み意欲が持続していた。生徒の感想では、「何か良いアイデアを出そうと考え込むと出ないけど、友達の良いアイデアにみんなでつけ足していくのが楽しかった。」とあり、グループワークの中での思考の深まり、取り組み意欲の持続など、集団作用による一定の効果があった。また、自分の考えが集団の中で認められたり、自分の持っている知識・能力が集団の中で生かされたりする機会となり、美術の苦手な生徒にとっても、意欲を持って取り組むことができた。

協同的探究学習においては、個人→グループで探究したあと、必ず個人にフィードバックさせる機会を作る必要があったが、グループ討議と発表用画用紙の制作に時間がかかりすぎて、個人で振り返る過程が不十分であった。「一人で発想することよりグループで発想した方が楽しい」とい。感想は多く見られたが、生徒一人一人の感性（良さ・美しさを能動的に感知する力）が生徒個人の中でどれだけ磨かれていったのかが疑問として残った。単に良い発想のパターンを身につけるだけではなく、良さ・美しさを日常生活の中で探っていく姿勢を習慣化させていく手だてを授業の中で工夫していく必要があると感じた。また、協同で課題に取り組むことは、個人での制作・鑑賞が中心となっていた美術の授業にとって、改めて集団で学ぶ意義を再認識させられるものであった。同時に小集団の中でいかに他と関わり思考を深めることができるのかを評価していくためには、教師側のきめ細やかな観察力と、よりの確な評価基準を作成していく必要があることを強く感じた。

第3章 協同的探究学習 アイディア

1. 授業案作成の指針

「教科」(中高と学年)における協同的探究学習授業アイディア (授業者氏名)

1 主題(単元・題材)名・資料名 「 」(教科書出版社名)

2 ねらい(単元の目標)

3 主題設定の理由(指導における自分の考え方)

(1) ねらいとする価値について(単元観)

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

(3) 資料について(教材観)

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
	(協同的探究学習を入れる ところを書いてください)		

5 本時のねらい(わかる学力)

生徒に本時で深めさせたいことや、身につけさせたい力などを具体的に書いて下さい。

(「6 展開」の導入問題や展開問題を考えた後に、本時のねらいを再度、考えることも有効です。)

※この様式は、[本校ウェブページのメインメニュー](#)→SGH→協同的探究学習→アイディアフォームダウンロードはこちら
からダウンロードしていただけます。(word形式)

6 展開（一つの協同的探究学習の単位の始めから終わりを書く）

導入問題

生徒に考えてもらう課題（多様な考えが可能な「非定型問題」）について、具体的に書いて下さい。

- ・複数の要因の関連づけが想定され、そこに深さがあること
- ・生徒の既有知識を生かし、考える道筋に多様性があること
- ・メカニズム、因果関係、判断の根拠などについての説明を題材にする
と作りやすいです。

個別探究

生徒が何をするのか、具体的に書いて下さい。

- ・基本的にはワークシート（プリント）に自分の考えを記述させます。
- ・生徒が考える時間をたっぷり取って下さい。
- ・答えだけではなく、そのように考える根拠を書かせて下さい。
- ・生徒が書いている内容を把握しておくとして協同探究に生かします。
- ・2時間に渡って授業をする時は、個別探究までで区切るようにします。

【予想される生徒の反応例】

生徒が個別探究をもとに発言しそうないくつかの考えを具体的に書いて下さい。

- ・理想的な考えだけでなく、素朴な発言なども含めて、多様性や因果などの深まりがみられる、いくつかの反応例があるとよい。

協同探究

クラス全体で何を話し合うのか、具体的に書いて下さい。

- ・根拠を必ず発言させて下さい。
- ・グループ→全体という流れであっても可。
- ・どのような発問で、多様な考えを関連づけるかが書かれているとよい
と思います。（多様な考えの間の共通点、類似点、差異点など）
- ・どんな意見がよいのか（意見が「よい」という基準は何か？：根拠の
明確さ、他事象との関連づけ等）を教師が示唆することも有効です。

展開問題

導入問題についての協同探究を生かして、本質的な理解（深い理解）に迫ることのできる課題を具体的に書いて下さい。

- ・導入問題同様、多様な考えが可能な「非定型問題」とします。
- ・国語科などの教科では、もう一度同じ課題を自分なりに納得のいく形で
書かせることも有効です。

【評価】について

- ・メカニズムや因果関係などの理解の深まりに対応する内容などを「A」

【導入問題のポイント（よさ）】

設定した導入問題が、「非定型問題」として、以下の
ような条件を備えていることを書いて下さい。

- ・生徒の既有知識を生かして関連づけできること
- ・考える道筋に多様性・多面性があること
- ・因果や根拠などの説明に深さが想定されること

【考えやすい工夫】

導入問題が本時のねらいに到達しやすくするために
考えた配慮を書いて下さい。

- ・考えて欲しい課題に生徒が集中できるように、そ
の他の要因はできるだけ簡単にするとよいです。

【協同探究の進め方、工夫】

様々な意見を引き出すための工夫を書いて下さ
い。

- ・グループ討議なら小さいボードに記入させるの
もよい。
- ・板書は、生徒の発言（の一部）をそのまま書く。
- ・因果等の深まりと多面性を引き出すよう心がけ
る。

【展開問題のポイント（よさ）】

導入問題と求める本質が共通であり、さらなる深ま
りを求めていることを書いて下さい。

- ・導入→展開の流れをどのように生かしているかを
書けるとよいです。

【評価】

A：A基準（より発展的な目標となる基準）をみ
たす生徒の記述内容等の要件を具体的に書
いて下さい。

B：B基準（クラス全員が達成すべき目標となる
基準）をみたす生徒の記述内容等の要件を具
体的に書いて下さい。

裏面に事後の生徒の反応と今後の課題を書く。

2. 「国語」(中学1年)における協同的探究学習授業アイデア

1 主題(単元・題材)名・資料名 「少年の日の思い出」(光村図書)

2 ねらい(単元の目標)

- ・新出漢字や言葉の意味、使い方などについての知識を身につけさせる。
- ・登場人物の心情の変化を読み取り、作品理解をより深いものにさせる。
- ・場面展開や語り手の変化に注意し、作品構造の特徴について考えさせる。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

分量、内容とも、小学校まで学んできた教材よりも難度の高いものであり、中学1年生の国語学習、特に「読む」領域に関する学習の集大成として位置づけられる。このテキストを読むことで、「読む」力をつけることはもちろんだが、中学生にふさわしい人格の形成に寄与する面にも期待したい。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

国語の学習に対しても意欲的な生徒が多く、発言も積極的である。一方で、漢字の書き取りテストをすると、小学校で既習のはずの漢字でも書けない生徒がかなりいる。昨今の詰め込み教育批判の影響か、基礎学力(できる学力)を身につける学習が軽視されていないかが、気になるところでもある。

(3) 資料について(教材観)

登場人物の心情の変化や語りの構造の把握など、物語教材としての学習要素をかなり網羅している。

内容の面でも、読み手にとって、罪を犯すという行為について深刻に考えさせられる物語であり、多感な成長過程にある中学1年生にとっては、自己を見つめ直し、人間とは何か、考えをめぐらせることにもつながる。定番教材として読み継がれてきている所以であろう。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
1	物語全体の構成を理解する。	語り手の変化、時制の変化などの明確な根拠に基づいて、作品の構成を押さえる。	定期テスト
2	物語前半を読解する。	情景描写と物語の展開の関連性について押さえる	定期テスト
3・4	物語後半①(「僕」の幼少期)を読解する。	出来事の展開にそって、「僕」の心情の変化を読み取る。	定期テスト
5~8	物語後半②(「僕」の少年期)を読解する。	出来事の展開にそって、「僕」の心情の変化を読み取る。	定期テスト
9・10	単元全体のまとめをする。 (協同的探究学習)	物語全体の内容を押さえた上で、最後の場面の持つ意味についての理解を深める。	定期テスト ワークシート

5 本時のねらい(わかる学力)

登場人物「僕」の心情についての理解を深めることがねらいである。協同的探究学習により、個人では気付かない視点に気付かせ、かつ、他者の共感を得られる説得力のある読みを練り上げることで、心情理解をより深い段階へと導きたい。

6 展開

導入問題

○物語の最後の場面で、「僕」が「ちょうを一つ一つ取り出し、指で粉々に押しつぶしてしまった。」という行動には、どのような意味があるのだろうか。物語に書かれていることを根拠として示しながら、説明してみよう。

個別探究 I

- ワークシートに記入する。
- 周囲と相談せず、自分一人で考える。
- そのように考えた根拠も含めて説明を書く。

協同探究 I

○4人グループを作り、導入問題について、各自の意見を発表し合い、グループとしての意見をまとめる。
【ここでワークシートを回収し、授業を終了する。生徒達の記述内容に目を通し、次時の授業の展開や板書計画を練っておく。】

協同探究 II

- 各グループの意見をクラス全体に発表する。授業者は、発表内容のうち重要な点を板書していく。
- それぞれの意見の、共通点や相違点について、周囲の生徒との話し合いなども行いながら議論する。
- 個別探究 I のうち、優れた内容を書いた生徒を授業者が指名し、その生徒はクラス全体に発表する。

【予想される生徒の解答例】

- 共通点：「ちょう集めをする資格はない」「ちょう集めとの決別」「思い出を自分の手で消す」など。
- 相違点：「罪を償うため」「罪は償えないから消そうとした」「自らに罰を与えた」「八つ当たり」など。

展開問題（個別探究 II）

- 個別探究 I で取り組んだ導入問題に再度取り組む。
- ただし、次のような指示を加える。
 - ・グループやクラスでの話し合いを経て、うまく使えるような意見があれば、組み合わせてみよう。
 - ・紹介した意見がすべて正しいとは限らないので、よいと思った意見だけを取り入れよう。
- その後、ワークシートを回収する。授業者が、評価したり、指導・助言を書き込んだりしてから返却する。
- 次時に、生徒の優れた記述をプリントにして配布する。

【導入問題のポイント（よさ）】

- 物語全体を踏まえて考える必要がある。
- 明確に答えを絞ることができない。
- 理解度や表現力に差があったとしても、大半の生徒が議論に参加することができる。

【考えやすい工夫】

- なかなか書けない生徒には、根拠などは省略してもよい、何か思ったことを書くよう、助言する。
- この段階では、記述内容に対して指導・助言は行わず、自由に議論しやすい雰囲気を作る。

【協同探究の進め方、工夫】

- グループの構成はその時の座席順。
- 「誰か一人の意見を選ぶ、というだけでなく、複数の人の意見を組み合わせるなど、グループ内での話し合いを通じて、意見を練り上げてみよう」「必ずしも全員の意見を入れなければならないわけではない」という指示をする。
- 指名・発表の順番、指名する生徒を誰にするか、板書する文言などについて、授業者があらかじめ計画しておく。（出たとこ勝負の授業にしない！）

【展開問題のポイント（よさ）】

- 記述内容の比較が容易で、協同的探究学習を経て、どの程度理解が深まったのかを測りやすい。

【評価】

- A：物語本文中に書かれていることを根拠にしつつ、複数の意見を関連づけながら、「僕」の心情を説明することができる。例：「ちょう集めをする資格がないと思ったから、ちょうと決別しようとしてつぶした。」など。
- B：物語本文中に書かれていることを根拠にしながら、「僕」の心情を説明することができる。

3. 「国語総合 現代文」(高校1年)における協同的探究学習 授業アイデア

1 主題(単元・題材)名・資料名 岩井克人『マルジャーナの知恵』(筑摩書房)

2 ねらい(単元の目標)

- ・筆者の主張である「差異が価値を生む。」という考え方を理解する。
- ・ポスト産業資本主義社会の利潤創出構造を理解する。
- ・主張を支える具体例の効果について理解する。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

本単元は現代の諸問題について扱った教材で構成されている。現代社会は急激に変化していると言われるが、その中でも利潤の創出方法は変わっていない。この「マルジャーナの知恵」は、その原則を述べた文章である。この単元を学習することで、複雑そうに見える社会の仕組みを知る機会としたい。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

社会についてまだ深く知らない高校生にとって、めまぐるしく状況が変化するようになった現代では会社が何によって利潤を得ているかを知る機会ほとんどないだろう。そのような生徒にとって、知識基盤社会である日本においてどのように利潤を生み出しているのかを知る機会としたい。

(3) 資料について(教材観)

筆者の岩井克人の著書は、現代社会における「差異」について数多くの著書がある。『マルジャーナの知恵』は、高度情報化社会における利潤の創出の仕組みについて、わかりやすい例を挙げており、生徒にとって現代社会を知るよい機会になる教材だと考える。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
1	本文内容理解への導入 第1段落の読み取り	難語句の意味調べと漢字の読み、全文通読と初読の感想、現代社会の状況を確認する。	難語句の意味が言える。 初読の感想を言える。 社会の状況を理解している。
3	内容把握 第2～4段落の読み取り	「マルジャーナ」の例から情報の価値が何によるものかを掴む。 変化する社会の中で変わらない利潤創出の仕組みを読み取る。 例がもたらす効果を考える。	情報において「差異」が価値を生むことがわかり、その仕組みを説明できる。 例えと主張が結びついていることを理解している。
2	利潤創出の仕組みの例を考える。 (協同的探究学習)	情報の差異による利潤創出の例と説明を自分で考える。	適切な例と説明がされている。

5 本時のねらい(わかる学力)

情報の差が価値を生み利潤創出の方法となっていることを自分の言葉と例で説明する。

6 展開

導入問題

○自分が考える「情報の差異が価値と利潤を生む」例を考え、どのように利潤を生んでいるか説明しよう。

個別探究

○自分の知っている「情報が価値を生んでいる」例を考える。

○その情報が、どのような違いを創出し利益を創出しているか検討し、その説明を考える。

【予想される生徒の記述例】

- ・ゲームにおける課金制度。
- ・各種動画配信サービス。
- ・ソフトウェアのアップグレードサービス。

協同探究

○4人で一つのグループを作り、自分の考えた例を説明し合う（グループ内交流）。他のグループに対して説得力のある例を話し合って考え、黒板に書く。

○各グループの代表者は、クラス全体に対して、グループで話し合った例のうち、最も説得力があるか、誰も思いつかないと考えられる例を発表し、クラス全体で共有する。

○発表された例の間の共通点、類似点、差異点について、また、各グループの例の特徴的な点について、クラス全体で話し合う。

展開問題（個別探究2）

最初に自分が考えた例とクラス全体での話し合い（協同探究）の内容を踏まえて、もう一度自分が一番納得のいく例を書いてみよう。

【導入問題のポイント（よさ）】

- 本文の内容を踏まえた具体例を考えることができる。
- 現代社会において成立している例かを考えなければならないという探究の深さがある。

【考えやすい工夫】

- 現代の高校生は、日々情報の中で生きているため、身近に考えられる。

【協同探究の進め方、工夫】

- 物ではなく情報の差異という範疇で考えさせる。
- どのような仕組みで利益を得ているかに目を向けさせる。

【展開問題のポイント（よさ）】

- 様々な例の中で、自分が一番腑に落ちる方法で理解を深めることができる。
- 自分とは違った見方や方法を自分の考えに取り入れることができる。

【評価】

- A：情報の差異についての例であり、差異が利益を生む仕組みを適切に述べている。
- B：情報の差異の例であるが、利益を生む説明が適切ではない。

4. 「社会」(中学・地理的分野)における協同的探究学習授業アイデア

1 主題(単元・題材)名 地理的分野「資源・エネルギーと産業からみた日本」

資料名 「中学社会・地理的分野」(日本文教出版)

2 ねらい(単元の目標)

日本の資源・エネルギー利用の現状、国内の産業の動向、環境やエネルギーに関する課題などをとくに、日本の資源・エネルギーと産業に関する特色を理解する。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

資源・エネルギーの海外依存度が高い日本であるが、安定的な供給を確保するためにとられている方策について考察させる。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

生徒間の地理に関する知識量には大きな個人差がある。ただ、知識がある生徒でも書物やウェブサイトから得たことを知っているだけに留まっていて、現実の社会を自分が持っている知識に照らし合わせて眺めることは必ずしも得意でないことが多いように感じられる。言い換えれば「できる学力」はあっても、「わかる学力」に繋がっていない生徒が相当数いるという状況である。

(3) 資料について(教材観)

教科書に基づいて進行するが、個別探究の部分では各自が個人で調べてきた資料を持ち寄って協同探究することで、より深い学びを行う。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
3	世界と日本の資源・エネルギー【協同的探究学習】	鉱産資源の偏在性や、各国のエネルギー供給状況を学び、日本のこれからの資源・エネルギー問題について協同的探究学習を行う。	資源・エネルギーの分布状況を理解する。 日本のエネルギーの展望を持つ。
2	世界と日本の第1次産業	国際情勢の変化の中で日本の第1次産業が置かれている現状を学ぶ。	日本の農林水産業の現状と課題の理解。
2	世界と日本の第2次産業	日本の第2次産業が置かれている現状を学ぶ。	日本の工業の現状と課題の理解。
2	世界と日本の第3次産業	日本の第3次産業の現状と変化を学ぶ。	日本の商業・サービス業の現状と課題の理解。

5 本時のねらい(わかる学力)

教科書の記述を理解するだけでなく、個人で調べたことをさらにグループ内で協同探究させ、さらには「都市鉱山」を取り上げて物事の因果関係を探る姿勢を養うというように、より深い学びができるようにする。

6 展開

導入問題

- 資源・エネルギーが乏しい日本が。それを克服しようと工夫していることを探る。

個別探究

- 生徒一人一人が、書物や新聞・インターネットなどで実例を調べてくる。(前時最終部分+宿題)

協同探究

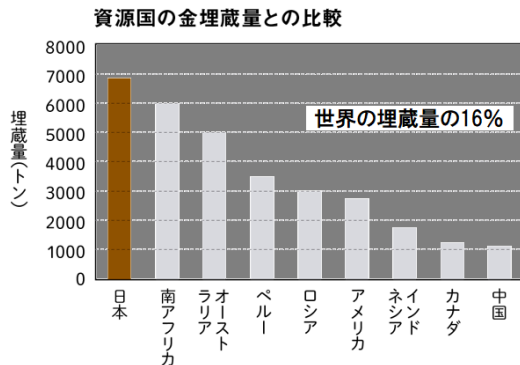
- グループ内で各自が調べてきた事例を報告し合い、異なる事例間の「一般的共通性」を探る。
- クラス全体の協同探究で、グループで見いだした事例間の共通点を発表し、関連づけることで一般化を図る

【予想される生徒の反応例】

- ・他グループの発表を聴き、自グループとの共通点や相違点を見つけて発言する。

展開問題

- 日本は世界中の金の埋蔵量の16%をも占めるという見方がある。これはどういうことか。



個別探究

- 生徒一人一人の原因を考えてみる。

協同探究

- 各自が考えた原因をグループ内で発表し、他のメンバーの意見と比較検討する。さらに、各グループの発表を聴くことで、より多面的に考えることの必要性に気づく。

【導入問題のポイント(よさ)】

- 身近な問題でありながら、日本の社会の根幹をなす重要な問題の一つである。

【考えやすい工夫】

- 教科書内にも探る手がかりがあるだけでなく、各自が個別探究で深めやすい問題である。

【協同探究の進め方、工夫】

- 1人一例ずつ発表し、メンバー全員で素早く共通点をまとめる
- いくつかのグループに発表させる
- 生徒の気づき(発言)も板書する。

【展開問題のポイント(よさ)】

- ・歴史と関連づけられること
- ・第2次産業の授業の動機づけができること
- ・リサイクル意識の高まりが期待できること

【評価】

- A: 金が世界でわずか18万t程しかない希少金属であること、リサイクルを「持続可能な社会」実現の行動としていることなど、関連要因にも着目している。
- B: 携帯電話やPCなどから回収する「都市鉱山」という概念が理解できている。

5. 「現代社会・政経」(高校生)における協同的探究学習授業アイデア

1 主題(単元・題材)名 「現代政治の特質と課題」

資料名 「現代社会」もしくは「政治経済」(いずれも東京書籍)

「私たちが拓く日本の未来」(総務省・文部科学省)

※中学校社会科でも対応可 その場合は「中学社会 公民的分野」(日本文教出版)

2 ねらい(単元の目標)

現代日本政治の現状と課題を認識した上で、政治参加、特に選挙の意義について考察する

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

先進国特に日本では、若者の政治離れが顕著である。自身が主権者であるという自覚を持たせるためにも、政治が身近なもので生活と結びついているということを選挙の学習を通して感じさせることが重要である。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

選挙については中学校で一度履修しているものの、しくみの話を中心に授業が展開されがちで、堅い内容と認識している生徒が少なくない。政治に対する関心の度合いは個人差が大きいことから実践的な学習を通して、政治が身近なものであるということをつえさせたい。

(3) 資料について(教材観)

教科書は、仕組みの話が中心であることから、「私たちが拓く日本の未来」を活用する。投票率のデータの読み取りを踏まえた上で、模擬選挙の実践につなげる。公約比較サイトや選挙公報を活用する。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
1	選挙のしくみと課題	民主的な選挙の4原則、選挙制度の比較、日本の選挙の課題について学ぶ	選挙のしくみと課題についての理解(テスト)
1	政党と利益集団 世論とマスメディア	政党の存在意義、利益集団の政治へのかかわり、大衆民主主義の現状と課題について学ぶ	政治に関わるそれぞれのファクターについての理解(テスト)
1	若者の政治への関心を高めるには? ～模擬選挙の実践～(本時)	日本の選挙の低投票率の現状を踏まえ、模擬選挙を実践する。	選挙の争点を分析し、自分なりの基準で投票を行う(ワークシート)

5 本時のねらい(わかる学力)

近年の政治離れ(特に若年層)の現状を踏まえ、実際に選挙の争点を分析することなどをした上で自分なりの基準で候補者を選ぶという選挙の過程を体験し、政治は身近なものであるということを感じさせることがねらいである。

6 展開

導入問題

- 近年の投票率の傾向はどのようになっているか
- 選挙に行かない理由はどのようなものか

個別探究

- 資料から読み取る

協同探究

- クラス全体で発表し、共有する

【予想される生徒の反応例】

- 衆議院より参議院、地方選挙の投票率が低い
- 最近の選挙の投票率低下が顕著 ○若年層の投票率が低い ○政治に関心がない人が多い
- 適当な候補者（・政党）がないという人が多い

展開問題

- どのように候補者を選べばよいか

個別探究

- 投票をする際には何を基準にすればよいかを考える

協同探究

- 4人グループを作り、話し合う
- クラス全体に発表する
- 2017年の名古屋市長選挙を題材に、選挙の争点、候補者の主張の違いを分析する（新聞記事、選挙公報を活用する）。具体的には、名古屋城木造復元、議員報酬増額の2つの争点を元に座標軸をつくる。
- 一部の班を指名し、クラス全体に発表する

個別探究

- 名古屋市長選挙の具体的な争点を踏まえ、投票する際の基準を設定し、模擬選挙を行う
- その場で開票を行い、実際の結果と比較する

【導入問題のポイント（よさ）】

- 高校生が何となくは認識している現状を再確認する問いである

【考えやすい工夫】

- 資料を提示していることから比較的考えやすい。
- 机間指導を行い、着目点のヒントを提示する

【協同探究の進め方、工夫】

- 司会を決めると良い
- いくつかのグループに発表させる
- 基本的には、どのような回答でも許容する
- 政治的中立性に配慮する
- 秘密選挙の原則に配慮したワークシートづくりをする

【展開問題のポイント（よさ）】

- 若年層の投票率が低い一因は、誰に投票すればよいか分からないという点であるので考えさせる意義がある。
- 生徒にとってあまりなじみのない選挙公報を活用して争点を考えさせる。

【評価】

- A：名古屋市長選挙の争点に加えて、自分なりの基準を持って投票できる
- B：名古屋市長選挙の争点で投票できる

6. 「英語」(中学2年)における協同的探究学習授業アイデア

1 主題(単元・題材)名・資料名 「NEW CROWN 2 Lesson 7 Presentation」(三省堂)

2 ねらい(単元の目標)

- ・ 比較級, 最上級(形容詞・副詞)の働きを理解する。
- ・ 図や表を効果的に使い、説明・描写・発表する力を養う。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

これまでに学習した過去形、未来形、進行形、不定詞に加え、この単元で比較を学び、一層幅広い表現を用いてコミュニケーションができるように、Listening、Reading、Writing、Speaking の4技能を総合的に高めて、英語でプレゼンテーションができることを目指す。協同的探究学習を通して、生徒の英語科の「わかる学力」として、生徒自身で研究課題を設定し、調査した結果をまとめ、英語で発信する技術と能力と自信を養いたい。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

中学2年生は2クラスで各クラス男子20名、女子20名の合計40名である。英語の授業では、毎回ペアワークやグループワークを行っているが、全員が積極的にワークに参加してまじめに取り組み、練習後に発表者を募ると何人も挙手して発表できるほど、自主性、創造性が豊かである。

(3) 資料について(教材観)

Lesson 7 は「Presentation」というテーマで中国人学生のメイリンがプレゼンテーションの準備をしているストーリーを通して比較を学んでいく。そしてメイリンは最後に「E-メール、手紙、電話などの通信手段の人気度」についての調査結果を発表する。単元の最後に実際に各自で調査をして「プレゼンテーションをしよう」というSpeaking活動が設定されている。具体例はインド人学生のラーズが「クラスで人気のあるスポーツ」について発表例が提示されている。生徒のレベルにより、個人、グループ、或いはクラスで取り組むことができる課題である。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
3	比較級, 最上級(形容詞・副詞), as ~ as ...	文法事項を正しく理解する。	比較に関する知識を身につけている。
1	比較級, 最上級の活用	学習した文法事項を使い問題を解く。	比較に関する知識を身につけている。
1	調査結果の読解	[説明文] 通信手段についての発表原稿を読む。	発表原稿を読んで、そこに書かれている事実を読み取ることができる。
2	調査結果の報告(協同的探究学習)	クラスで人気のあるものについて、プレゼンテーションをする。	聞き手が理解しやすくなるように工夫してプレゼンテーションしている。
1	振り返り	説明・描写・発表することができるか振り返る。	聞き手に効果的に伝わるように、プレゼンテーションすることができる。

5 本時のねらい(わかる学力)

本時は協同的探究学習を通して発表の準備を行う。プレゼンテーションに際して「①あいさつ ②何について発表するか ③グラフを示す ④何が人気か ⑤ほかと比べてどうか ⑥まとめ ⑦あいさつ」などの英語表現について4人グループで調査した内容を分担して②～⑥に必要な英文を作成する。お互いに英文をチェックしあって原稿を完成し、発表分担をして練習をする。英語で発表する際の表現を「わかる学力」として高める授業を目指す。

6 展開（2時間扱い：本時はその第1時）

導入問題

グループで調査したことを発表するための原稿づくりと発表練習をする。グループで分担して次のカードの英語を完成する。

Hello, everyone. We are going to talk about _____.

Look at this graph. It shows _____.

What's most popular? _____ is.

_____ is in second place.

_____ is the least popular of the four.

_____ are more popular than _____.

That's all. Thank you for listening.

個別探究

グループで分担した英文カードを、個人で辞書を使いながら完成する。グラフと関連させて、必要な場合には比較表現を使って英文を書く。

協同探究（グループ）

- 個人で書いた英文を持ち寄り、グループ内でお互いにチェックする。
もっと良い表現があればグループで相談して決める。先生に質問しても良い。だれがどの部分を発表するかを分担する。
- 分担した英文を、個人で数回音読して発表練習をする。
- グループで初めから終わりまで通して数回発表練習をする。
- 聞き手が分かり易い工夫について考え、相談して実践する。

【予想される生徒の反応例】

4人の小グループなので全員が発表に関わることができる。グループであらかじめ調査した内容を英文にするのでやる気を持って取り組める。分担して個人で英文を作成する際も、お互いに助け合って英文を書くことが予想される。

協同探究（クラス全体）

<次時>

- クラス全体に対して、4人グループで発表する。
- 発表後に感想や提案、聞き手に効果的に伝えるコツなど、クラス全体でディスカッションを行う。

展開問題

<次時>

グループで発表した内容について、発表後のディスカッションの内容も生かして、すべて個人で発表原稿を作成してまとめる。

【導入問題のポイント（よさ）】

好きなスポーツ、弁当のおかず、テレビ番組、映画、関心のあるニュース、学校行事、音楽、地元で人気のある場所、など各グループがクラスで調査した内容をもとに発表原稿をまとめるので、多様な答えを引き出す発問である。

【考えやすい工夫】

グループで分担するときの負担を軽減するために発表で使う英語表現は教科書と同じもので、1文ずつ別のカードにした。事前にグループで作成したグラフと関連づけながら比較表現を使って書く。

【協同探究の進め方、工夫】

個人で分担して書いた英文をグループでお互いにチェックして、より良い表現があるかを話し合う。発表練習は個人⇒グループの順に行い、グラフなどを使って、チームワーク良く発表できるように練習する。

【展開問題のポイント（よさ）】

発表原稿づくり、発表練習、クラスで発表、ディスカッション、そして最後に、グループで発表した発表原稿を個人で全部書いてまとめることにより、英語で発表する技術の向上をはかる。

【評価】

- A：発表内容をよく考えて練習し、発表の際に英文原稿に頼らずに発表できた。グループ活動において積極的に係わり他の生徒を助けて、グループ発表を成功させた。比較表現等を用いて、調査の目的・方法・結果を具体的に表現した英語発表の原稿を個人で作成できた。
- B：グループ活動において積極的に係わり自らの役割を果たしてグループ発表に貢献した。比較表現を用いた英語発表の原稿を個人で作成できた。

7. 「英語」(高校1年)における協同的探究学習授業アイデア

1 主題(単元・題材)名 「比較—原級・比較級・最上級を用いた表現」

資料名 「POLESTAR English Expression II」(数研出版)

2 ねらい(単元の目標)

- ・原級、比較級、最上級の形、意味、使い方を理解する。
- ・原級、比較級、最上級を使って他者比較をしながら、自分の意見を述べることができる。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

比較は中学で習った基本事項に加えて、クジラ構文を筆頭に特殊な形をした覚えるべき文法項目が多くあり、生徒が敬遠しがちである。高1では、まず構造や意味を把握し、文章を読んで理解できることが大切である。そのうえで、簡単な文章を作れるようにしたい。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

学習に対して意欲的で、文法事項には丁寧に取り組む。Speaking では間違えることを臆せず、どれだけでも話し続けることができる。プレゼンやレポートを行う際は、いかに面白くするかという文法そのものよりも伝える内容・伝え方に焦点が当たるため、ある程度のドリルワークを経たのちに行いたい。

(3) 資料について(教材観)

ダイアログやリスニング、簡単なドリル、自由英作文、スピーチとさまざまなタスクが盛り込まれている。定着/Practice には別のワークが必要であるが、USE/Presentation の面では、STEP 通りに進めていける。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
2	原級、比較級、最上級 Grammar	文法事項(形、意味)を正しく理解する。	正しく読める。 (定期テスト)
1	Exposure & Drill	教科書の Listening, Practice 問題を解く。	正しく書ける。 (定期テスト)
1	Exposure: Read Use 1 意見文を書く (協同的探究学習)	Reading (実際の文章を読む) Express Yourself に取り組む。 “Advertisement for something you like”	実際の文章を理解できる。 自分の意見を比較表現を使って書ける。 (レポート)
1	Use 2 プレゼンする (協同的探究学習)	“Advertisement for something you like”の発表(班→クラス) 展開問題 & HW: Rewrite	聞き手に意見が伝わるような表現ができる。 (プレゼンテーション)

5 本時のねらい(わかる学力)

自分の勤めたいものについて説明をするという意味のある文脈で文法事項を使い、また他者の書いた英文を読み聞きするなかで、比較表現の理解を深めたい。書いたものを Revise する際に協同的に取り組むなかで、様々な比較表現があることを実感させたい。

6 展開

導入活動

実際の広告を用意し、その中で使われている比較表現を探し、マークする。(もしくはインターネットでさまざまな企業の売り出しているサービスや商品のプロモーションを見せる)。

前提問題：どの表現を読んだときに、その商品をほしいと思ったか。

導入問題 「自分で広告を書こう」

トピック：“Write an advertisement for a food you like, and then make a presentation to your class.”

※food だとモチベーションが上がらない場合、something(anything) you like。

(教科書 L16 Real-World English: Presentation より)

個別探究 <ワークシート>

1. 何について書くか。売りは何か。
2. 比較を使って英語にしてみる。
3. 広告をデザインしていく(下書き)
4. (発表するための原稿を作る if needed)

【予想される生徒の反応例】

W/R をさせることで、文法事項を実際に使ってみるという意識が持てる。L/S が苦手でも落ち着いて考えられる。

協同探究 <プレゼンその1>

- ・グループに今できる範囲でのプレゼンをする。
- ・広告の下書き(原稿)をお互いに見せ合い、比較表現にアンダーラインを引く。文法的誤りも指摘する。
- ・そのほか、「これを言われると興味がわく」と思えた表現にアンダーラインを引く。
- ・もっと魅力的にするためにどのようなことが知りたいかをメモ&口頭で伝え合う。
- ・数人が「これを言われると興味がわく」と思えた表現と理由をクラス全体に発表し、意見を交流する。

展開問題

- ・広告を書き上げる(提出)。
- ・2, 3人がクラスへの発表を行う<プレゼンその2>

【導入活動のポイント(よさ)】

Exposure のひとつ。

実際の表現や、その周りの表現を見て使えそうなものを自分の表現に利用することができる。

【考えやすい工夫(導入問題)】

- ・「伝えたいことがある」と書きやすいため、趣味や興味のあるものの「売り」から考えて、箇条書きさせる。
- ・難しいテーマよりは身近なテーマを扱わせる。

【協同探究の進め方、工夫】

- ・一度グループのメンバーにプレゼンを試みる。
- ・推敲する。
- ・比較表現が効果的に使われているか。比較表現と、ぐっとくる表現にアンダーラインを引かせる。
- ・クラス全体への発表では、生徒が発表した表現を教師は板書し、比較表現の深まりにつなげていく。

【展開問題のポイント(よさ)】

他者の意見やクラス全体の協同探究を生かし、より幅広い表現に挑戦できる。

【評価】

- A : no more than, no less than など微細な意図やニュアンスを伝える比較表現を複数扱い、自分の意見を含めて表現できた。
- B : 複数の種類の比較表現を扱い、事実を表現できた。

8. 「音楽」(中学2年)における協同的探究学習授業アイデア

1 主題「仲間と思いや意図を共有し、表現できる音楽活動」

資料名「時の旅人」中学生の音楽2・3上

2 ねらい(単元の目標)

私は、音楽に対して「こんなふうに音楽で表現したい」という気持ちを自分なりにもち、仲間と「思いや意図」を共有しながら表現できる生徒を育てたい。しかしながら、音楽に対して仲間と一緒にどのように思いを込めたらいいのか、どんな意図をもって表現したらいいのか、具体的にわからないまま、ただ音楽活動に取り組む生徒が多い。仲間と同じ気持ちで表現する以前に、自分が音楽を通じてどのように表現したらいいかについて「思いや意図」をもつまでに至っていない。そこで、まずは生徒に明確な「思いや意図」を自分の中にもたせ、それらを周りの生徒と共有させることで、思いがけない表現方法を見つけたり、楽曲にふさわしい表現の仕方を取り入れたりすることができる機会を設けたいと考える。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

歌唱の際、音程に気をつけて歌詞を間違えないように歌うことは最低限の技能として身に付けてほしいが、それだけでは不十分である。このことから、曲によって歌詞や雰囲気の違いを感じ取り、自分の考える表現につなげるためには、楽譜に書かれていること(音の変化、旋律の流れ、強弱や速度、調性など)を把握し、それらを表現につなげるための手段として十分に取り入れさせたいと考える。日頃から、楽曲の分析をしたり、作詞作曲家や楽曲に隠された背景などを知ったりすることが大切である。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

本校の生徒は、音楽に対して意欲や関心をもって取り組む生徒が多い。しかし、歌唱してみると響きのある声で歌うことには至らず、大きな声を出して元気よく歌うことで十分だと思っている。また、合唱として「どんなふうに歌うか」という思いを共有する機会が少ないことから、ある程度ハーモニーができたところで満足してしまっている。これらのことを改善するために、基本的な発声方法の習得や、仲間とどのように表現したらよいかなどを話し合っ高めていく必要がある。

(3) 資料について(教材観)

「時の旅人」は中学2年生で扱う教科書や、副教材であるコーラスフェスティバル(正進社)に載っている定番教材であるが、今までの合唱曲に比べると、強弱や速度、調性の変化が多くあり、情景や感情の移り変わりを感じ取って表現しやすく、それぞれのパートが主旋律を担当するため、どのパートも主役となれる。また、同じ音程の繰り返しではなく、いつも新しい旋律が表れるため、楽曲を分析する際に、区切って考えやすいことから、この教材を選択した。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
1	・雰囲気や各パートの役割を感じ取る	・範唱を聴いて、曲の雰囲気を感じ取る。 ・各パートを教師のピアノとともに歌い、それぞれの特徴や役割を感じ取りながら歌唱する。	・意欲的に鑑賞、歌唱しようとしているか
2	・自分に合った音域で堂々と歌唱しよう	・自分に合ったパートを決定し、音取りをする。 ・ピアノが弾ける生徒に旋律を弾かせて(いない場合はパート別CDか教員のピアノで対応)、自分たちで音取りをし、のびのびと歌唱する。	・正しい姿勢や発声を意識して、歌唱しているか

3 (本時)	・思いや意図をもち、仲間と共有しよう (協同的探究学習)	・どのように歌うとよいか、楽譜に記されている記号や歌詞をもとに、自分や仲間の思いや意図を話し合ったり発表したりして共有する。	・思いや意図を表現、共有して、よりよい表現を求め、思いや意図を生かそうとしているか
4	・思いや意図を表現につなげ、合唱を創り上げよう	・前時をふまえて、共有した思いや意図を表現につなげる。	・思いや意図を表現に生かして合唱を創り上げているか

5 本時のねらい（わかる学力）

歌う生徒たちがどんな合唱曲にしたいか、どんなことを合唱で伝えたいかということを考えながら歌唱することで、歌詞のもつ力が発揮されたり、曲調などの雰囲気表現できたりすると考える。どのように歌いたいかについては、「優しい雨に打たれ」という歌詞であれば、「悲しい気持ちよりは、優しさを意識した柔らかい声で歌いたい」という思いをもったり、アルトのみが歌唱する「汗をぬぐって歩いた道」は、音楽記号のやや弱く（メゾピアノ）どおりに歌うのではなく、ぼんやりとした明確ではない昔を思い出しながら歌っているからではないか」という意図をもったりしながら歌唱することが大切である。各々が歌詞や音楽記号から読み取った感情や表現するための手段を互いに伝え合い、仲間の意見を共有したり取り入れたりしながら歌唱することで、自分1人では気づけなかった表現の手段を知ることができる。さらに、同じ思いや意図をもちながら合唱することで、仲間の表現を認め、自分の表現を高め、よりよい合唱へとつながると考える。

以上より、本時で高めたい音楽科の「わかる学力」としては、①各生徒が歌詞や音楽記号を手がかりにどのように歌うとよいかを考えること、②自分と仲間の思いや意図を共有すること、③それを通じて自分だけでは気づけなかった感情や表現の手段を知ること、④以上を意識して合唱を行うこと、が考えられる。

6 展開

導入問題

「時の旅人」について「楽譜のどの場所のどのポイントをどのように歌うとよいか」を考える。40人で合唱をつくり上げる時に、何が必要となるか。歌声、各パートの旋律、伴奏、様々あるが、最終的には歌う生徒たちの「思い」や「意図」が大切であることに気付かせる。

個別探究

個人で「どのように歌いたいか」のポイントを絞り、1人一枚の付箋を使って、具体的に「楽譜のどの場所のどのポイント（歌詞、音楽記号、旋律、リズム、強弱、速度、など）をどのように歌うとよいか」を考える。クラスらしい合唱曲をつくり上げるために、歌う生徒本人たちが気をつけたい場所、意識したい場所を明確にし、具体的にどのように歌唱するのかを考えて、付箋に記述する。

【予想される生徒の記述例】

- ・「ソプラノパートで2度現れる【ラララ】は、主旋律になるアルトや男声をつぶしてしまわないよう音量は小さめに、ソプラノらしい綺麗な声で歌いたい。」
- ・「男声の後半の【いま君と】、【僕らは旅人】は主旋律として堂々と歌いたいが、強弱がそれぞれ違うので強弱に合わせて、力強かったり大切にすることをもちりして歌いたい。」

【導入問題のポイント（よさ）】

どんな合唱にしたいか、どんな思いを届けたいかについて考えることは、音楽的な技能や能力を高めることよりも、取り組みやすいことだと考える。「フォルテだから元気よく歌いたい」という率直なことでも、「歌詞はさみしい内容だが、記号はフォルテやフェルマータ、アクセントが使われており、ダイナミックに歌うことによってさみしさを払拭したい」といった具体的なことでも、自分が考える「時の旅人」に対しての思いや意図を発言することができるという安心感をもつことができる。

【考えやすい工夫】

どんな合唱にしたいかという思いは、曲全体であったり、歌詞に限ったり、それぞれのパートのことであったり、合唱曲の中であればどんなことを書いてもいいという縛りのない自由な活動にした。悩む生徒には「どんなことに気をつけて歌いたいか」という声かけをすると、どんなことを意識しているか歌うときのことを思い出して考え、実感したことを記述することができると思う。

協 同 探 究

各パートでかたまり、個人で記述した付箋をみんなに伝えながら該当場所（プリント）に貼っていく。プリントには、1. 歌詞、2. 強弱・速度の変化、3. 音の高低、4. 曲想（雰囲気など）の箇所が分けられており、記述した内容に応じて近い場所に貼る（例：「テンポの遅くなる〇小節目は、ゆったりした気持ちで歌いたい」→2. 強弱・速度の変化と4. 曲想（雰囲気など）の間あたりに貼る）。似た内容であれば重ねて貼るなどして、各々がどんな思いや意図をもっているか、どんなことを意識したり、考えたりしているかがわかるようにする。

各パートで貼られた付箋をリーダーが主となってパートで話し合い、集約し、「特にパートで意識したいこと」を決めて、クラス全体に対して発表する。

【予想される生徒の反応例】

- ・（3. 音の高低差に誰も付箋を貼らなかったアルト）「高低差に誰も貼らなかったけど、いいのかなあ？」、「でもそれって私たちアルトは音の高低差がないし、あまり意識せずにそれ以外のところを大切に歌ったらいんじゃないかな。」、「特に貼られた、強弱や速度の変化を重点に考えたらどうかな。」
- ・（2. 強弱や速度の変化に多くの付箋が貼られた男声）
「僕たちは特に強弱や速度の変化に気をつけて歌おうと思います。でも強弱と速度の変化はたくさんあって、特にここ！って場所はありますか？」、「〇〇くんの付箋に書いてある部分は男声が旋律でもあるから、特に大きく歌うのがいいんじゃないかと思う。」、「あと、この歌詞と旋律は何度も繰り返されているから大切にしたい言葉だと思うし、後半に進むにつれてさらに大きくしていくべきじゃないかな。」

展 開 問 題

パート内の各生徒が「特にパートで意識したいこと」を意識して歌うことを心掛け、さらに他のパートがどのようなことに気をつけて歌うのかを把握して、合唱練習を行う。自分が担当するパートだけでなく、他のパートにも耳を傾け、どのようなことに気をつけながら歌唱しているのかをわかった上で合唱することで、自分自身も同じように気をつけて歌唱したり、主旋律を目立たせるためのサポート役として手助けできるようなハーモニーが付けられたりすることを目標とする。

【協同探究の進め方、工夫】

- ・各パートで一人ひとりが付箋に記述した内容を発表し、付箋をプリントに貼る。内容は具体的なことを書いて、周りの生徒たちにより深く分析させる。
- ・各々の付箋を貼り終わったら、パートでどんなことに気をつけてどのような思いをもって歌うか、話し合う。付箋が多く貼ってある場所はみんなが気をつけたい場所、思いを込めて歌いたい場所なため、重点的に話し合う。
- ・パートでまとまった意見や思いを板書し、クラス全体に対して発表する。
- ・他のパートがどのようなことを考えているかを知るだけで、自然とその箇所を他のパートも意識して歌えるようになる。

【展開問題のポイント（よさ）】

- ・パートの仲間が同じ思いをもって歌えるよう、各生徒が話し合ったことを意識しながらパート練習を行う。
- ・合唱練習では、個人で考えた思い、それをパートで共有した仲間と歌声を合わせることで、また他のパートとハーモニーや曲想を合わせて歌うことで、仲間の思いを感じ取りながら視野を広くもった歌唱ができる。

【評価】

導入問題に対して各生徒が付箋に記述した内容の分析と、パートやクラス全体で思いや意図を共有した後のパート練習・合唱練習における各生徒の観察にもとづいて、本時のねらいに関する評価を行う。

A 評価：思いや意図を付箋に記述、互いに共有し、仲間とよりよい表現を追究しようとしているか

B 評価：自分の思いや意図を付箋に記述し、仲間とともに表現に生かそうとしているか

9. 「体育」(高校1年)における協同的探究学習 授業アイデア

1 主題(単元・題材)名 ネット型球技 バレーボール

2 ねらい(単元の目標)

個々の基本的技能を向上させるとともに、互いの個性を理解し認め合い、お互いの個性を生かすことでチームが個々の技能を足した力以上となることを体感し、チームプレーに対する意識を高めさせる。また、自分たちでチームの課題を見つけ、その課題克服のための練習を設定したり、作戦を立てたりしながら、協力し合ってゲームに臨む楽しみを学ぶ。

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値について(単元観)

自分や仲間の個性(体の特徴や個人スキル)を理解し、6人制バレーにおけるポジションごとの役割に気付かせ、互いの個性が生きるポジションを模索する。そのなかで、チームとしての強みを理解し、ゲームの中で生かせるように練習をする。また、どうしても埋まらないチームのウィークポイントを見つけてその課題を克服するための練習を行う。個人の長所を他者が高めたり、短所を補ったりできるチームスポーツの楽しさであることを学ぶ。

(2) 生徒の実態(児童・生徒観)

中学までのバレーボールの授業では、ポジションごとの特徴や役割を意識せず、とにかくラリーを続けることを意識して練習を行っている。中学3年の頃には、強いサーブを打てる者が多くなり、レシーブスキルが追いつかない状態であった。

(3) 資料について(教材観)

生徒は中学の授業で、バレーボールにおける個人スキルの基礎となるサーブ、オーバーハンドパス、アンダーハンドパスは既に学んでいる。体育館ではバレーボールコートが2面取ることができ、約30名の生徒がゲームをする場合には5~6名を6チーム、あるいは、6~7名を5チームつくり、2面同時にゲームをすることができる。ボールは30個以上あり、基本スキルの練習は個人でもペアでも可能である。また、審判台が4台あるので、ネット際に設置し、審判台の上に立ちスパイクを打ち込みレシーブの練習をすることもできる。体育館には舞台があり、ミーティングスペースとして活用することができる。

4 単元の指導計画

時数	学習内容	学習活動	評価
1	オリエンテーション エキシビジョンゲーム	まずは一度ゲームを行い互いのおおよその技能レベルや特徴について考える。	態度(初めての仲間の技能レベルや特徴について考える。)
6	サーブ・パス・スパイク	基礎スキルの練習をする。 ペアやグループで行う。	思考(技術のポイントを考える。)
1	スキルテスト	基礎スキルのテストを行う。 これをもとにチームを決める。	技能(技術のポイントを理解し、表現する。)
4	A:ゲーム&ミーティング B:トレーニング&ミーティング (協同的探究学習 A&B 2時間を2回繰り返す。)	ゲーム後に話し合い、見つけた課題をもとに練習し、ゲームに臨む。	思考(個性を生かしたチームプレーを考える。)
4	ゲーム	実践の中でチームの特徴を生かしたプレーに挑戦をする。	思考(チームの特徴について考え試行錯誤しながらプレーする。)

5 本時のねらい（わかる学力）

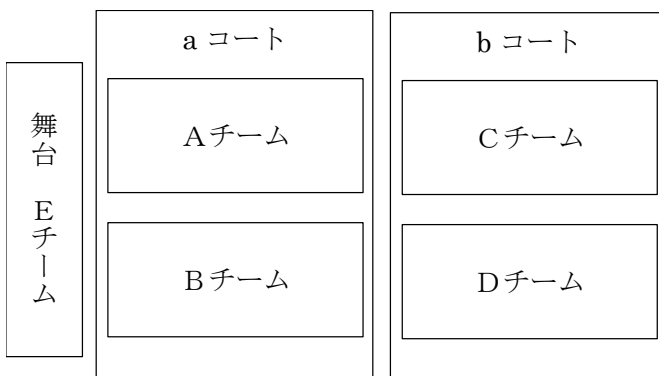
チームの特徴を生かしてゲームを行うプロセスを経験し、課題の発見の仕方や、練習をする意味について考える。また、チームとしてプレーする場合、個人で短所とと思っている部分についてチームの弱みとならない場合があることを学ぶ。

6 展開A：ゲーム&ミーティング

導入問題

- 自分たちのチームのベストポジションについてゲームを行いながら試行錯誤し考える。

個別探究（グループ探究）



- 8分×5本ゲームを行う。
- ゲーム内ではサーブのみローテーションし、ポジションは固定で良いものとする。ゲーム内でポジションチェンジは可とし、ゲーム中は積極的に話し合うこととする。

協同探究（中間交流）

- 自分のチームのポジションと特徴（強みや弱み）を発表する。
- 他のチームと共通する部分について考える。
- それぞれのチームの特徴からどんな課題があるかについて考えどんな練習で克服できるか意見を出し合う。

展開問題（個別探究2）

- 自分のチームの課題をもとに練習方法を考え、簡単なアイデアをワークシートに書きこむ。（1分程度）

【導入問題のポイント（よさ）】

- 6人制バレーボールにおけるポジションの特徴や役割、また、反則にならないようにポジションを固定する方法については予め教師が説明し、ポジションを考えやすくする。

【考えやすい工夫】

- ゲームをしていないチームは舞台上でミーティングを行う。他チームの試合を見ながら「自分のチームの特徴」について考えたことをミニホワイトボードにメモする。

【予想されるミーティングの例】

- ・ 背が高い人が3人いる。
- ・ スパイクが打てる人が2人いる。

【協同探究の進め方、工夫】

- 最後に中央ホワイトボード前に集まり、それぞれのチームのミーティングの内容を発表する。

【展開問題のポイント（よさ）】

- 今日一日のアイデアをメモ程度に残しておく、その後振り返って考えやすいようにしておく。
- チームでの話し合いや中間交流での情報交換を踏まえて、一度個人に立ち返って自分の考えを書き留める。

【評価】WSの記述内容に加えて、協同探究・G探究時の発現も考慮する。

A：チームの弱みとなるような特徴について、克服の方法を考え、答えを導き出せている。

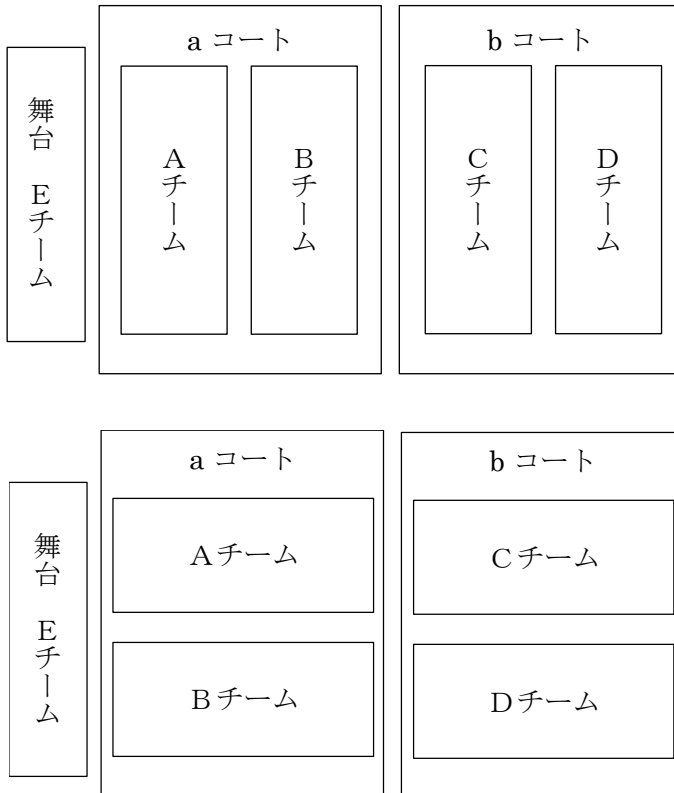
B：チームの特徴から強みを見つけ、その特徴を生かしたゲームをするためのポジションや練習内容について考えている。

6 展開B：トレーニング&ミーティング

導入問題

- 各自で考えたチームのための練習方法について、各チーム内で発表し、どんな練習をするのかを決める。

個別探究（グループ探究）



- 8分×5本 ローテーションで練習を行う。各チーム約30分練習を行うことができる。（コートの使い方は図のどちらかを教員が指示する。）

協同探究

- チームで行った練習とその目的を発表する。
- それぞれの練習と目的が合っているか、その練習が有効か意見を出し合う。

展開問題（個別探究2）

- 自分の仲間の特徴を理解したうえで、ポジションを考えてワークシートに記入する。

【導入問題のポイント（よさ）】

前回のゲーム&ミーティングを踏まえて持ち寄った練習方法の中からチームにとってより良い練習を考える。

【考えやすい工夫】

- 練習をしていないチームは舞台上でミーティングを行う。他チームの練習を見ながら「自チームの練習目的と、目的に対し有効かどうか」を評価する。改善すべき点があれば話し合う。ミーティングのポイントをミニホワイトボードにメモする。

【予想されるミーティングの例】

- ・ スパイク練習のトスがうまく上がらない。
- ・ レシーブ練習のスパイクが強すぎる。

【協同探究の進め方、工夫】

- 最後に中央ホワイトボード前に集合し、それぞれのチームのミーティングの内容を発表する。

【展開問題のポイント（よさ）】

- ゲームや練習を踏まえて、チームのベストなポジションを考える。

【評価】WSの記述内容に加えて、協同探究・G探究時の発現も考慮する。

A：チームメイトの特徴を生かす方法を考え、答えを導き出せている。

B：チームの特徴から強みを見つけ、その特徴を生かしたゲームをするためのポジションや練習内容について考えている。